



Association for Cultural Typhoon
カルチュラル・スタディーズ学会

BACK
STRIKES
BACK,
THE

Cultural Typhoon 2021

The 'Back' Strikes Back —「裏」の逆襲—

2021 6.26 sat / 27 sun

Symposium: Theatre 21, '21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa' Individual / Group Presentations: Live Streaming

カルチュラル・タイフーン2021 〈日程〉2021年6月26日(土)、27日(日) 〈参加費〉2,000円(学生・金沢市民1,000円)

主催 カルチュラル・タイフーン2021実行委員会



目次 contents

タイムテーブル	4
timetable	
シンポジウム要旨	8
symposiums	
パネルセッション要旨	12
panel sessions	
プロジェクト・ワークス要旨	38
project works	
実行委員紹介	42
organizing committee members	

ルーム1

ルーム2

ルーム3

ルーム4

オンデマンド

シアター21

09:00
10:00
11:00
12:00
13:00
14:00
15:00
16:00
17:00
18:00

12:30-14:30 あ文 p12

アート・歴史

大石茜(C) 潘夢斐 Yao Yiming
上田由至 中村昇平

12:30-14:00 あ文 p14

男性研究

ケイン樹里安(C) 鈴木華織
小平沙紀 田川夢乃

12:30-14:00 あ文 p15

コロナ禍と多文化社会の可能性——マイノリティが抱えるヴァルネラビリティ

MATTHEWS, Joel(O)
鈴木弥香子 山本直子
宮下大輝 王希璇

12:30-14:00 あ文 p16

ポストフェミニズムの時代にアンジェラ・マクロビーを読む

田中東子(O) 川口遼
河野真太郎 中村香住
梁・永山聡子

あ文 p38

Project Works

叙事詩的絵画の研究
上原勇希(O)

ウラカナザワ——引揚者たちの記憶が紡ぐまち
大木紗英子(O)

14:40-16:40 Aa p17

英語セッション

大山真司(C)
Kyoko Shoji Hearn
ILINA Olga
Shinji Oyama
Mooney, Suzanne

14:10-15:40 あ文 p19

アート・クラフト

狩野愛(C) 片倉葵
沖田愛有美 宮津大輔

14:10-15:40 あ文 p21

裏日本の芸術学のポストコロニアリティ

菊池裕子(O) 清水冴
長谷川ななみ 神野元次郎

14:10-15:40 あ文 p22

女性研究

菊地夏野(C) 加藤穂香
依田ひかり 石川真知子

15:50-17:20 あ文 p23

アートプロジェクト

光岡寿郎(C) 山下里加 楊淳婷
松尾加奈 シルマン・タニヤ

15:50-17:20 あ文 p25

文化と農村——実践者に注目して

森田のり子(O) 目黒茜
佐藤知菜 宮部峻

15:50-16:50 あ文 p26

現代日本における人外女性像——国境とメディアを越境するジェンダー表象を巡って

ESCANDE, Jessy(O)
PAWEL, Pachciarek

16:50-17:50 あ文 p26

パンデミックにおけるフィールドワーク演習の挑戦

田沼幸子(O) 深山直子

09:30-11:30 あ文 p8

シンポジウム

スポーツとアートの汽水域

YouTube Live

竹崎一真(C) 町田樹
高橋洋介 山本敦久

11:30-12:20

総会

Zoom ミーティング
:事務局より別途連絡

16:00-18:00 あ文 p9

シンポジウム

伝統と革新——金沢からグローバルに思考する

YouTube Live

毛利嘉孝(C) 菊池裕子 長谷川祐子

SpatialChat
(コーディネーター:荒井悠介)

11:00-14:00 p40

雑誌&ラジオ「5: Designing Media Ecology」の販売・試聴・トーク

Selling, Listening to, and Talking on “5: Designing Media Ecology”

水越伸(O)

12:00-15:00 p40

参与するエスノグラフィ——SNSが入り込む若者文化の形成 新宿、高円寺、渋谷を巡って——

明治大学 商学部
藤田結子セミナー

18:30-21:00

懇親会

あ文 日本語発表
Aa 英語発表
(O)...Organizer
(C)...Chair

	ルーム1	ルーム2	ルーム3	ルーム4	ルーム5	シアター21
09:00						
10:00	<p>09:30-11:00 (あ文) p27</p> <p>ポピュラー文化と表象</p> <p>藤田結子(C) 山本恭輔 酒井美優 松浦優</p>	<p>09:30-10:30 (あ文) p29</p> <p>政治思想・社会運動</p> <p>毛利嘉孝(C) 五野井郁夫 下村晃平</p>		<p>09:30-11:00 (あ文) p30</p> <p>Outsider Art kick it out!</p> <p>高岡智子(O) 青木惠理子 松本拓</p>		<p>09:30-11:30 (あ文) p10</p> <p>シンポジウム 「裏日本」から戦後を再考する—「内灘闘争—風と砂の記憶—」展をめぐって</p> <p>YouTube Live</p> <p>小笠原博毅(C) 稲垣健志 高原太一 星野太 多田美代 本康宏史 「内灘闘争—風と砂の記憶—」制作メンバー</p>
11:00	<p>11:10-12:10 (あ文) p31</p> <p>空間とエンターテインメント</p> <p>近藤和都(C) 余玖欣 ロート マーティン</p>	<p>11:10-12:40 (あ文) p32</p> <p>ドキュメンタリー</p> <p>岩崎稔(C) 長谷川健司 洞ヶ瀬真人 丸山友美</p>	<p>11:10-12:40 (あ文) p34</p> <p>パンデミックとツーリストの主体性</p> <p>石野隆美(O) 安ウンビョル 岩本晃典 遠藤理一 中植渚</p>	<p>11:10-12:40 (あ文) p34</p> <p>アートの感性の逆襲</p> <p>岡原正幸(O) プルサコワありな 上岡磨奈 澤田唯人 慶應義塾大学文学部チーム</p>	<p>11:10-12:40 (あ文) p35</p> <p>鳥取から「裏日本」を再考する</p> <p>アレクサンダー・ギンナン(O) 渡邊太 岡田有美子</p>	
12:00						
13:00						
14:00	<p>13:40-15:10 (あ文) p36</p> <p>「裏ルート」で交差する東アジアのアート</p> <p>稲垣健志(O) 山本浩貴 呉夏枝 近藤健一</p>	<p>13:40-14:40 (あ文) p36</p> <p>島嶼における「生」からたどる歴史</p> <p>岡本直美(O) 金大勲</p>	<p>13:40-15:10 (あ文) p37</p> <p>移動する若者—都市、メディア、グローバル化</p> <p>藤田結子(O) 荒井悠介 狩野愛 鈴木亜矢子</p>	<p>13:40-15:10 (あ文) p38</p> <p>脱植民化(デコロナイゼーション)のデザイン</p> <p>宮田雅子(O) 村田麻里子 谷川竜一</p>	<p>13:40-15:10 (あ文) p38</p> <p>Project Worksライブ配信 叙事詩的絵画の研究</p> <p>上原勇希(O) ウラカナザワ—引揚者たちの記憶が紡ぐまち 大木紗英子(O)</p>	
15:00						
16:00						<p>15:30-17:30 (あ文) p11</p> <p>シンポジウム 現代を徘徊する「ターナーの奴隷船」—レイシャルキャピタリズム、あるいは「Back」Lives Matterをめぐって</p> <p>YouTube Live</p> <p>稲垣健志(C) 井谷聡子 小笠原博毅 川端浩平</p>
17:00						
18:00						

(あ文) 日本語発表
(Aa) 英語発表
(O)...Organizer
(C)...Chair

6/26 09:30-11:30
シアター 21

スポーツとアートの汽水域

Thinking of the Estuary: When Sport meets Art

あ文

Chair

竹崎一真 (成城大学) / Kazuma Takezaki (Seijo University)



Panelists

町田樹 (國學院大學) / Tatsuki Machida (Kokugakuin University)

高橋洋介 (角川武蔵野ミュージアム) / Yosuke Takahashi (Kadokawa Culture Museum)

山本敦久 (成城大学) / Atsuhisa Yamamoto (Seijo University)

私たちがスポーツに惹きつけられるとき、そこには必ず“アート”がある。そしてそのアートは、近代スポーツを変革する契機として今浮上しつつある。

町田樹氏が取り組んできたフィギュアスケートは、“アート”であるからこそ新たなスポーツとしての可能性を拓いた。しかし、そうしたアーティスティックスポーツの世界は、競技化が進むにつれてアートの側面が後景化し、点数中心の競技性に埋没するという矛盾と困難を抱え始めている。対して町田氏は、数字に還元されえない美を表現・創作する競技者が切り拓くアートとしてのスポーツに注目することで、スポーツのさらなる可能性を見いだそうとしている。また、昨年金沢21世紀美術館で「de-sport」展を企画した高橋洋介氏は、現代アートの歴史においてスポーツの空間や意味を芸術家たちが組み換えてきたことに着目し、スポーツの概念にラディカルな問い直しを迫ると同時に、アートそれ自体にも刺激を与えようとしている。そして山本敦久氏は、C.L.R. ジェームズが描いたように民衆にとってのスポーツがときに植民地主義や人種差別、性差別といったものに抗するアート（技法／技芸）になりうることに着目している。

スポーツとアートが混じり合う汽水域。そこに広がる風景は、スポーツ／アートの二元論を瓦解させ、私たちに生きるための術（アート）を与えてくれるのではないだろうか。本シンポジウムは、元競技者であるスポーツ研究者、キュレーター、社会学者という三者の汽水域的視点から、スポーツとアートの現在について議論を展開していく。

When we are attracted to sport, there is always *art*. Notably, *art* is now emerging as an opportunity to transform modern sport.

Figure skating, the sport that Tatsuki Machida has been working on, has opened up the possibility of a new sport because it is *art*. However, the world of such artistic sport is beginning to face contradictions and difficulties, given that the art aspect recedes into the background as the sport becomes more and more competitive. The art that is integrated into the sport gets buried under a score-oriented and highly competitive mechanism. Machida is trying to find further possibilities for sport by focusing on sport as art, a conceptualisation pioneered by athletes who express and create beauty that cannot be reduced to numbers. In addition, Yosuke Takahashi, who organized the *de-sport* exhibition at the 21st Century Museum of Contemporary Art in Kanazawa last year, is now focusing on how artists have reconfigured the space and the meaning of sport in the history of contemporary art and attempts to radically rethink the concept of sport while simultaneously stimulating the art itself. Meanwhile, Atsuhisa Yamamoto emphasises that people's engagement in sport, as depicted by C.L.R. James, can constitute an art (technique/craft) that resists colonialism, racism, and sexism.

The estuary is a platform in which sport and art can intermingle. The landscape in the area may dissolve the dualism of sport and *art* and give rise to the *art* of living. In this symposium, we will discuss the current state of sport and art from the estuarial perspectives of three panelists: a former athlete-turned-sports researcher, a curator, and a sociologist.

6/26 16:00-18:00
シアター 21

伝統と革新——金沢からグローバルに思考する

Tradition and Innovation: Thinking Globally from Kanazawa

あ文

基調講演 1

「工芸は逆襲できるか? : コロニアルな過去、現在の主体性、そして持続可能な未来」

講演者: 菊池裕子 (金沢美術工芸大学教授・芸術学／工芸史)

基調講演 2

「「成る」ことと「在る」ことのエコロジー: 今日における伝統の情報化とモノとしての手仕事」

講演者: 長谷川祐子 (金沢21世紀美術館館長・東京芸術大学大学院教授・キュレーター)

討 議: 菊池裕子 x 長谷川祐子 x 毛利嘉孝 (司会: 東京芸術大学大学院教授・社会学／文化研究)

Keynote Speech 1

Can Craft Strike Back? Colonial Past, Current Subjectivities, and Sustainable Futures

Speaker: Yuko Kikuchi (Kanazawa College of Art, Professor of Art and Design)

Keynote Speech 2

The Ecology of 'Becoming' and 'Being' : The Informatization of Tradition and Handicraft as Objects Today.

Speaker: Yuko Hasegawa (Director, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa and Professor, Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts)

Discussion: Yuko Kikuchi, Yuko Hasegawa and Yoshitaka Mori (Moderator: Professor, Tokyo University of the Arts)

伝統と革新 ---- しばしば二項対立で語られる二つの概念ですが、実際にはこの二つはもっと複雑な関係を持っています。最も伝統的なものが革新性をもっていたり、逆に革新的なものの根源に伝統が潜んでいたりは決して珍しくありません。そしてこのことは、過去から現在、そして未来へとリニアに続く単線的な「歴史」という概念を問い直すことを要求します。

本シンポジウムは、「伝統工芸」と「現代美術」という一見異なるカテゴリーに見える二つの領域の交錯点を、まさにこの二つが交錯する金沢という都市から考えようというものです。長くロンドン芸術大学で教鞭を取り2019年に金沢工芸大学教授に就任した、東アジアの工芸史を専門とする菊池裕子氏、そして国際的な展覧会を数多く手掛け、この春21世紀美術館館長に就任したキュレーターで、東京芸術大学大学院教授の長谷川祐子氏の二人を迎え、伝統と革新の同時代性について金沢から／グローバルな視点から議論します。

Tradition and innovation ---- are often dichotomized, but in reality, they have a much more complex relationship. While the most traditional things are often most innovative, conversely, the most innovative things often have their roots in tradition. And this calls for a rethinking of the notion of "history" as a linear line from the past to the present. The aim of this symposium is to consider the intersection of the two seemingly different categories of "traditional craft" and "contemporary art" from the perspective of Kanazawa, the city where these two intersect. We invite two keynote speakers: Yuko Hasegawa, curator of numerous international exhibitions, new director of the 21st Century Museum of Contemporary Art, and professor at the Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts and Yuko Kikuchi, professor of art and design at Kanazawa College of Art. She has published many books and essays including Japanese Modernisation and Mingei Theory: Cultural Nationalism and Oriental Orientalism (London: Routledge Curzon, 2004). We will discuss the contemporaneity of tradition and innovation from Kanazawa and from global perspectives.

6/27 09:30-11:30
シアター 21

「裏日本」から戦後を再考する
——「内灘闘争—風と砂の記憶—」展をめぐって——
Rethinking the Postwar Period from "Back Japan":
The "Uchinada Struggle—Memory of Wind and Sand" Exhibition

あ文

Chair

小笠原博毅 (神戸大学) / Hiroki Ogasawara (Kobe University)

Panelists

稲垣健志 (金沢美術工芸大学) / Kenji Inagaki (Kanazawa College of Art)
高原太一 (大妻女子大学非常勤講師) / Taichi Takahara (Part-time lecturer at Otsuma Women's University)
星野太 (東京大学) / Futoshi Hoshino (The University of Tokyo)
多田美代 (内灘砂丘ボランティア代表) / Miyo Tada (Uchinada Sand-dune Volunteer)
本康宏史 (金沢星稜大学) / Hiroshi Motoyasu (Kanazawa Seiryu University)
「内灘闘争—風と砂の記憶—」制作メンバー / Graduate Students of Kanazawa College of Art



本シンポジウムの目的は、石川県河北郡内灘町に残る(残している)「内灘闘争」の記憶・記録を手掛かりに、「裏日本」から戦後を再考し、自分たちのアクチュアルな問題としてこれを引き受けていく回路としてのアートの可能性を探ることにある。

1952年、日本政府から内灘村(当時)の砂丘地を、米軍の砲弾試射場に使用したいとの申し出が石川県にあった。一旦は期限付きで試射場としての使用が許可されたものの、砲弾の炸裂音や、約束に反し永久使用を目指す政府への反感から住民の怒りが高まり、53年、戦後初となる大規模基地反対運動「内灘闘争」に発展した。

この「内灘闘争」には、清水幾太郎や丸山真男をはじめとする多くの知識人も参加しており、それ自体興味深い。しかし、それ以上に我々の目を引くのは、現在の内灘町には「内灘闘争」に関する資料館「風と砂の館」があり、米軍施設の一部であった射撃指揮所、着弾地観測所がそのまま残されていることである。とは言え、こうした記録・記憶を「遺産」にしたり、「財」にしたりすることに関心があるわけではない。むしろ、そのようにして「内灘闘争」を「過去に留めて物象化」することに抗い、これを自分たちの問題としてどう引き受けていくか、その回路としてのアートの可能性をオーディエンスとともに考えてみたいのである。

そのためにシンポジウムで取り上げるのが、金沢美術工芸大学の教員・院生によるグループ展「内灘闘争—風と砂の記憶—」である。各メンバーが彫刻、インスタレーション、油画、映像などそれぞれの表現方法を用いて、「内灘闘争」に着想を得た作品を制作し、展示する。このグループ展は、米軍施設跡などを会場に、カルタイの日程にあわせて開催する予定である。

The purpose of this symposium is to reconsider the postwar period from "Back Japan" based on the memory and records of the "Uchinada Struggle" that remains in Uchinada (located close to Kanazawa), and to explore the possibilities of art as a means to undertake this as an actual problem of ourselves.

The "Uchinada Struggle" was the first large-scale movement against a US base after the Second World War in Japan. Many intellectuals such as Ikutaro Shimizu and Masao Maruyama also participated in this struggle, which is interesting in itself. However, what is even more eye-catching is that Uchinada has a museum featuring the "Uchinada Struggle", and also contains the now disused US military facilities. However, we are not interested in turning these records and memories into "heritage" or "goods." Rather, we would like to think with the audience about how to take on this struggle as our own problem, and explore the possibility of art as a means for that.

To that end, the symposium will feature a group exhibition entitled "Uchinada Struggle — Memory of Wind and Sand" by faculty members and graduate students of Kanazawa College of Art. Work inspired by the Struggle, using their own methods of expression such as sculptures, installations, oil paintings, and images will be created and exhibited. This exhibition will be held in Uchinada, including at the site of the US military facility, in accordance with the schedule of the Cultural Typhoon.

6/27 15:30-17:30
シアター 21

現代を徘徊する「ターナーの奴隷船」——レイシャルキャピ
タリズム、あるいは「Back」Lives Matterをめぐって——
Turner's "Slave Ship" is Haunting Today:
Racial capitalism and 'Back' Lives Matter

あ文

Chair

稲垣健志 (金沢美術工芸大学) / Kenji Inagaki (Kanazawa College of Art)

Panelists

井谷聡子 (関西大学) / Satoko Itani (Kansai University)
小笠原博毅 (神戸大学) / Hiroki Ogasawara (Kobe University)
川端浩平 (津田塾大学) / Kohei Kawabata (Tsuda University)



1781年、イギリスの奴隷船ゾング号が100人を超える奴隷を海に「捨てた」。いわゆる「ゾング号事件」である。画家 J. M. W. ターナーは、この事件に触発され『奴隷船』(1840年)を描き上げた。そのターナーの奴隷船が現代を徘徊しているのだ。次々と海に捨てられる「使い物にならなくなった」奴隷たちは、交換可能な労働力として「消費される」現代の我々の姿そのものである。この資本主義という経済システムが続く限り、ターナーの奴隷船は徘徊し続けるだろう。

かつてセドリック・ロビンソンは、奴隷制・人種差別を土台にした資本主義を、レイシャルキャピタリズムと呼んだ。近年、そのロビンソンの議論を発展的に継承し、Black Lives Matter などの反レイシズム運動を、レイシャルキャピタリズムに対する異議申し立てととらえる研究が数多く発表されている。そう、Black Lives Matter とはターナーの奴隷船上での蜂起なのである。こうした成果を踏まえて、本シンポジウムは、Black Lives Matter を「現代アメリカ」の「人種問題」に矮小化してはならないという共通認識からスタートする。レイシズムとは現象や「倫理」の問題ではなく、システムや構造の問題なのだ。つまり、資本主義の「裏」に追いやられ、このシステムを「裏支えする」者たちすべての生の問題であり、その意味において、「Back」Lives Matterこそ本シンポジウムのテーマだと言えよう。そしてそれを起点にして、フロア、およびライブ配信を視聴してくれているみなさんとともに、この奴隷船への「逆襲」の方法を考えてみたい。

In 1781, the British slave ship Zong "threw" more than 100 slaves into the sea. This was the so-called "Zong massacre". The painter J. M. W. Turner was inspired by this incident and painted "Slave Ship" (1840). Turner's slave ship is haunting today. The modern-day equivalent of the "useless" slaves that were thrown into the sea one after another is the "consumption" of an exchangeable labour force. As long as this capitalist economic system continues, Turner's slave ship will undoubtedly continue to haunt us.

Cedric Robinson once called capitalism that is based on slavery and racism as "racial capitalism". In recent years, many studies have been published that seek to develop Robinson's argument further, regarding anti-racism movements such as Black Lives Matter as an objection to racial capitalism. Thus, Black Lives Matter is an uprising on Turner's slave ship. Based on these achievements, this symposium starts with a common understanding that Black Lives Matter should not be reduced to the "racial problem" of "present America." Racism is not a matter of "ethics", but a matter of system or structure. In other words, it is a problem of life for all those who are driven to the "back" of capitalism and "support" this system from the "back". In this sense, 'Back' Lives Matter is the theme of this symposium. Starting from that point, we would like to think about how to "strike back" against this slave ship with the audience.

6/26 12:30-14:30
ルーム 1

アート・歴史

あ文



Chair

大石茜
(筑波大学大学院)

Panelists

潘夢斐 (青山学院大学大学院) ヤオイミン (同志社大学大学院)
上田由至 (筑波大学大学院) 中村昇平 (金沢大学・日本学術振興会特別研究員)

Panelist 1 潘夢斐

東京の奥・根岸に住まう——隠栖、交友、場所の象徴性をめぐって

本研究は今まで文学研究と地域史研究の中で議論されてきた根岸に集った文化人の集団に、社会学の角度から光を当て、隠栖、交友、場所の象徴性を分析する。クロードS・フィッシャー (*To Dwell Among Friends: Personal Networks in Town and City* 1982) とピエール・ブルデュール (*The Rules of Art: Genesis and Structure of the Literary Field* 1996) の社会学の理論と手法を用い、「風雅な土地に風流人が集まる」ということの意味を再検討する。

江戸・東京の北西部に位置する根岸は、江戸から明治時代にかけて風流人の集まる場所として語り続けられている。「東叡山の北の麓なり…風流の庵をむすへる文人墨客の許へ知己のひとひと訪て詩を作、歌よみ…」(岡山鳥『江戸遊覧花暦』1893年;元版は1837年)、「上野の山陰にして幽趣あるか故にや都下の遊人多くはここに隠棲す」(斎藤長秋『江戸名所図会』1836年)と描写されている。明治に入り、「根岸党」、「長清会」、「根岸短歌会」、「根岸倶楽部」などの文化人集団もこの土地で結成された。

本研究は明治期の根岸に注目し、そこに居を構えていた人々がいかに「根岸」という場所、「根岸に住まう」ということの意味を認識していたかを考察する。江戸の面影がまだ濃く残っている明治初期・東京時代を経験し、上野の山の公園地化・明治政府の表舞台化や鉄道の開通など近代化・都市化の影響を受け、都心から離れている奥地・根岸を居住地として選択する理由とそこでの生活(隠居か、社交的な生活か)に関する言説を批判的に読み解く。「東京下谷根岸及近傍図」(大槻文彦 1901)も手がかりとし、その文化人住民がどのような地域コミュニティー(故人及び同時代の人)を想像し、その地域紐帯・ソーシャルネットワークがどのような意味を持つか、「傲世逸俗」(柳田泉『幸田露伴』1942)のような自己を演出するため戦略的に居住地と交友圏を選んだかを検証する。

Panelist 2 ヤオイミン

歴史学にさげすまれた「印章」の物語：「ハイ・カルチャー」という墓場から考える

物事を正確に観測するために「下げ墨」という技は発明されていた、同様に、過去を正確に観察するための「歴史学」も次第に確立されてきたことも周知のようである。「観念」は歴史の頂点に居座り様々な事象を止揚・さげすみ、今の「〇〇史」などの新方法に変たいしつつあるが、其の勢いは止まることが無いが、しかしこういう観念が満ちた歴史は「文化」の存在にどのくらい余地を残したのか？

この歴史と概念のハイアラキーに反旗を掲げ、日常生活の言語に注目することは今までのカルチャー・スタディーズの強みであるが、しかし「批判」などの大義名分を伴い、旧有の文化に関する意味論の領域は殆どカタカナ化のカルチャー・スタディーズの視野から排除されてしまった。「文化」を脱構築し、それをモノや消費や資本や力関係などで解説し切ることは、確かに旧来の権力と対峙する姿勢を保っていたが、果たしてそれは「価値」の解放と共有をもたらしたのか？むしろそれは「意義」の私有と伝承をそのまま有力な識者に譲渡したのではないか、という疑問がうまれる。

芸術史などの「学問」に譲渡されたハイ・カルチャー、あるいは伝統文化は批判されると同時に特権化していく、そして仮に「物質的武器」での批判、所謂「文化革命」が行われて打倒、破壊、解体されても、その不死身は蘇るのだろう。しかし私がここで注目したいのは瓦礫だらけの墓場そのものである。重ねられた批判の剰余としての価値、観念化し切れない名残、言表を裏切る記憶と詩——学問的な表に出られない裏の世界、まさに「文化」が存在・

生息している場を考えるには、まずこのような荒涼な墓場を陣地として据えるような、思考の緊張感が欠けてはならないと考える。

いずれ私たちの文化や生活は概念や歴史として捕獲されていくことには違いない、しかし問題なのは、それぞれの概念や知識が一つの世界に収束・序列化され、さらに私有物として有力者に収蔵されることである。これこそ私の研究が闘ってきたところである。「印章」や「印学」、「篆刻」など、いわゆる「伝統文化」に属する現象を、存在したある文化の瓦礫の一枚として見つめ、そこで発見された物語と歴史の交錯や摩擦及び情熱を紹介することこそ、今回の報告でシェアしたいところである。

Panelist 3 上田由至

大正後期における路上の芸術活動と社会運動

本発表は、大正後期に活動した芸術家グループ「マヴォ」をはじめとする前衛芸術家たちが路上を舞台に行った芸術活動の意義と、そうした路上の芸術活動が消えていった理由を探る試みである。マヴォは絵画、アッサンブラージュ、ダンス、雑誌、舞台装置など、多岐にわたる活動を行ったグループであるが、結成直後の「二科落選歓迎移動展覧会」、関東大震災後の「バラック装飾」、文芸グループ「文党」とともに「書齋より街頭へ」を叫ぶ示威行動など、路上空間においてもさまざまな芸術活動を行った。しかし1925年7月以降、集団的なこうした路上の芸術活動は見られなくなる。この年は、マヴォもそこに含まれる、「大正期新興美術運動」と今日呼ばれる前衛芸術運動の再編期にあたり、ボルシェヴィズム系の芸術運動とアナキズム系の芸術運動に分かれるのだが、このことから路上の芸術活動の衰退の原因を、表現主体の思想の変容のみに求めるだけでは不十分であろう。

そこで本発表では、その原因を考察するためにマヴォらの表現の舞台であった路上空間の変容に注目する。当時の路上空間は大正デモクラシーの諸運動の舞台でもあったのであり、こうした路上空間のありようがマヴォらに好影響を与え彼らの活動を触発していたことは疑い得ない。しかしだからといって、民衆による大正デモクラシーの諸運動が彼らの路上の芸術活動を促進し、反対に国家による社会運動への弾圧がそれを阻害したと単純に結論付けることはできない。ここでは同時代に坪内逍遙が構想していた、「デモクラシー」の訓練としての民衆参加型ページェント劇を検討することで、大正デモクラシーの運動それ自体における差異を見だし、そこに前衛芸術家による路上の芸術活動が衰退していった原因を求めたい。

Panelist 4 中村昇平

みせることに特化してゆく武術——インドネシア、ジャカルタ郊外の集落武術と田舎演劇の実践

インドネシアの首都ジャカルタ周辺の先住民族として知られるブタウィ人は、18世紀以降、様々に異なる流派の武術を実践してきた。それらはひと目にわかるほど異なり、ルーツもそれぞれに異なる。一方で、武術の演舞を不可欠の構成要素とする演劇の形式がブタウィ人に共通の文化伝統と認識され、結婚式などの機会に頻りに演じられる。

発表者が調査を行ったデポック市のカンブン・ウタン集落では、ゴンベルと呼ばれる流派が、集落の伝統武術として実践されている。当該集落での武術実践は、技の練習会に加え、結婚式での演劇を主な活動とする。練習会では、特定の動きをすべき理由を教授者が論理的に示せること、その論理を学習者が即座に体感できることが重視される。ここでやりとりされる「技の論理」は、身体構造や動きを根拠として語られるものでありながら、必ずしも実戦に有用という意味での理合が求められるわけではない。本発表は、練習会で演劇用の技を開発する実践の分析から、演劇の実践と教授学習実践との連続性を考察する。演劇用の技の開発の過程では、実際に敵をいかに制するかという目的意識は背景に退き、観衆からいかに見えるか、観客にいかに見せて楽しませるかという目的意識が前景化する。そうした実践の中では、競技や闘技としての武術ではなく、演技としての武術の完成度や創造性が希求される。実践者たちはユーチューブでアクション映画の動きを探し、その動きを参考にして演劇にとりいれたり、逆に演劇で使用する武術の技を応用して自分たちでアクション映画を撮影し、ユーチューブにアップロードする。

こうした実践の考察から、人にいかに見せ、楽しませるかという前提で武術の技が学習・開発される中で、闘いの技術である武術が「見世物」としての芸芸にその性質を変えてゆく過程を論じるとともに、伝統を絶えず改変し

てゆく創造的な過程が実践者たちの生活にいかなる意味をもつかを論じる。

6/26 12:30-14:00
ルーム 2

男性研究

あ文



Chair

ケイン樹里安
(大阪市立大学)

Panelists

鈴木華織 (法政大学大学院) 小平沙紀 (東京大学大学院)
田川夢乃 (広島大学)

Panelist 1 鈴木華織

中上健次「異族」と石井聰互「狂い咲きサンダーロード」から考える 80年代〈反逆児〉の描出

中上健次作品における最長の小説「異族」(1984年～未完)の中心となっているのは、被差別部落の「路地」のタツヤを中心とする、在日韓国朝鮮人、アイヌ、沖縄、日米の混血児といった異なるバックボーンを持つマイノリティの青年たちが、自分たちの身体にある青いアザから「青アザの同志」として、様々な境(ボーダー)を越えて繋がりを見出そうとする物語であるが、その一方で、タツヤが師範代を務める空手道場に出入りする暴走族と右翼団体が登場する。タツヤは、暴走族と彼らが所属する右翼団体を束ねる役目を担うが、それはタツヤらの後見人である右翼の大物の槇野原が企てる満州国再建の駒としての役目を負うものであった。

この作品に登場する暴走族と右翼は、読み手に違和感を与えるかのように書かれている。それは、暴走しない暴走族であり、天皇を敬う姿が見えない右翼という、私たちがその言葉から想像するのは逆の姿となっているのだ。本発表ではこの疑問点から発し、暴走族と右翼団体という反逆児たちの表象を分析することで、中上が彼らに何を求め、そして何を作品に込めたのかという考察を行う。そのための補助線として、石井聰互(現:石井岳龍)監督の映画「狂い咲きサンダーロード」(1980年公開)との比較を取り入れたいと考えている。映画公開と「異族」の連載開始には4年ほどのタイムラグがあるものの、「狂い咲きサンダーロード」には「異族」と同様に暴走族と右翼団体、加えてそれらにおける男同士のホモソーシャルな関係性という共通する設定が見られるためである。小説と映画というジャンルの違いはあるが、「プラザ合意」(85年)以前の「バブル景気前夜」とも言える80年代初頭という時代背景を含めて、この時期における社会や権力に抵抗する若者たちの描出を分析する。

Panelist 2 小平沙紀

外見至上主義と韓国男性の身体観:美容実践からみる現代韓国社会

韓国は国民一人あたりの美容整形件数世界第一位であり美容産業の発達や美意識の高さは他国と比較しても突出して高い。女性だけでなく男性の美意識も非常に高く、男性用化粧品国民一人当りの売上高は世界第一位を誇り、男性一人当たりがスキンケアに使う費用は米国やフランスの10倍以上にもなる。また男子学生の就職面接に向けた「就活整形」など、美容整形の男性患者も年々増加しており、患者全体に対する男性の割合は推定で約15%~20%と欧米と比較しても高い。

本研究では、儒教文化や徴兵制など歴史的に男性優位な規範を有するとされる韓国社会において、それらと一見、矛盾するような韓国男性の美意識の高さと外見至上主義の生成構造について、ピエール・ブルデュエの理論を軸に分析を試みる。具体的には、「男性の容姿が資本化するとはどのような『界』——自律的な固有のルールに基づ

いた、ヒト・社会集団の競争的関係構造——なのか」という問いを立て、容姿が資本として機能するのはどのような界(社会構造)で、どのような容姿がどのような種類の資本として機能しているのか明らかにする。韓国のように社会全体で外見判断が容認されている界では容姿の資本化を前提に界によって容姿が資本として果たす役割や種類、志向する容姿が独特の特徴を有すると考えられる。中でも、韓国男性の界の構成に不可欠な要素の一つである徴兵制に着目し、「通過儀礼」として経験されヘゲモニックな男性性を獲得する主要な通路となる徴兵制が彼らの身体観、具体的には美容実践とどのような相関関係にあるのか考察を試みる。方法としては、近年注目を浴びている兵役を終えたアイドルや俳優(通称グンピルスター)のファッション雑誌における言説分析および韓国男性たちへのインタビュー調査を行い、韓国男性の積極的な美容実践がどのような文脈により発展・変化しているのかを明らかにする。

Panelist 3 田川夢乃

フィリピン・カラオケパブ空間における日本人男性顧客間のポリティクス

本発表は、フィリピンにおける日本人向けカラオケパブを在比日本人男性間のポリティクスの場として考察することを目的とする。日本人男性顧客とフィリピン人女性接客者とが会するパブ空間に日本人女性である発表者が接客者として介入することによって明らかとなる現場のリアリティを通して、在比日本人社会における日本人男性間のヘゲモニー闘争を明らかにする。ここでは、発表者が参与観察を行ったマニラ首都圏M市にある一軒のカラオケパブの事例を扱う。日本人向けカラオケパブとは、主に日本人男性を顧客とし、フィリピン人女性接客者がお酌をしたり会話やカラオケ、ダンスやゲームなどを用いたりして顧客をもてなす接待飲食店である。

セックスワークやナイトワークを対象とする従来の研究では、主に接客者と顧客間の関係性に焦点が当てられており、顧客間の関係性にはあまり目が向けられてこなかった。顧客を対象とする研究においても、性的サービスを利用する動機や人種、所属階層や職種に関しては言及されているが、概して、顧客は一枚岩的に語られる傾向にある。しかしながら、こうした顧客の多様性に対する視点の欠如は、顧客はサービスの取引相手か人身売買の加害者かという固定的で二項対立的な見方を招き、翻ってセックスワークは仕事かそうでないかという不毛な争いを呼び起こしてしまう。

このことから本発表は、マニラ首都圏のカラオケパブを利用する顧客の多様性に焦点を当てる。ここでは普段の生活では関わることのない在比日本社会の異なる職種や社会階層の男性たちが会うコンタクト・ゾーンとしてカラオケパブを捉える。年齢、職種、社会階層、滞在理由などが様々な日本人男性顧客の間の折衝や対立に注目することで、これまで語られてこなかった側面からナイトワークの現場を描写することが本研究の目的である。

6/26 12:30-14:00
ルーム 3

コロナ禍と多文化社会の可能性 ——マイノリティが抱えるヴァルネラビリティ

あ文



Organizer

マッシューズ, ジョエル
(東京都立大学・
大学教育センター)

Panelists

鈴木弥香子 (日本学術振興会特別研究員 PD 立教大学)
マッシューズ, ジョエル (東京都立大学・大学教育センター)
山本直子 (東京都立大学子ども・若者貧困研究センター)
宮下大輝 (慶應義塾大学大学院)
王希璇 (横浜市立大学)

2020年3月、マドンナは自身のインスタグラムのアカウントで、新型コロナウイルスの感染拡大に言及し、コロナは「平等」をもたらすものであると論じた。あらゆる人々がその社会的属性にかかわらず感染すること、その平

等性がウイルスの恐ろしさであると同時に「素晴らしさ」であると語ったのだ。しかし、この約一年で私たちがグローバルな規模で目撃してきたように、このパンデミックは平等をもたらしてなどいない。むしろコロナ禍は、不安や対立を煽り、これまでも存在していた社会的・文化的・経済的・人種的な亀裂をさらに深めてきた。このパンデミックはグローバルな現象であるが、それと同時に、この危機へのナショナル／ローカルな対応はそれぞれの地域に固有の不平等や分断を浮き彫りにしてきた。コロナウイルスはヴァルネラビリティやリスクがいかに人種、階級、ジェンダー間で偏在しているかを明らかにしたのだ。

このパネルでは、マイノリティが抱えるヴァルネラビリティを主題とし、いかに「非常事態」において人種／ジェンダー間などの不平等が再構成／強化されるのかについて考えたい。鈴木報告では、災害やリスクがエスニック・マイノリティに与える影響について扱ったコロナ禍以前の研究を整理し、彼らが直面してきた不平等や排除について理論的に考察する。続いてマシューズは、コロナ禍にグローバルに台頭したナショナリズムが、いかに人種／エスニシティ間の亀裂を深めてきたかについて論じる。山本報告ではコロナ禍における外国ルーツの世帯の経済状況の変化が子どもに与える影響を考察する。宮下は在日外国人への生活支援としての「母語・母文化保持」に関する教育活動について検討し、在日外国人への教育支援に対するコロナ禍の影響についても論じる。最後に王は「日本に居住する外国につながる若者に対するコロナウィルスの影響」のアンケートの結果と「多文化ユースプロジェクト」の活動について報告する。

6/26 12:30-14:00
ルーム 4

ポストフェミニズムの時代に
アンジェラ・マクロビーを読む



Organizer

田中東子
(大妻女子大学)

Panelists

川口遼 (東京都立大学子ども・若者貧困研究センター)
河野真太郎 (専修大学)
中村香住 (慶應義塾大学大学院社会学研究科非常勤講師)
梁・永山聡子 (早稲田大学ほか非常勤講師)
田中東子 (大妻女子大学)

本グループ・セッションでは、2021年初夏に刊行されるアンジェラ・マクロビーの2冊の翻訳書——“Feminism and the Politics of 'Resilience': Essays on Gender, Media and the End of Welfare” (青土社より刊行予定) および “Be Creative: Making a Living in the New Culture Industries” (花伝社より刊行予定)——の内容に基づきながら、「ポストフェミニズム」・「ネオリベラリズム」・「レジリエンス」・「クリエイティブ・ワーク」といった概念を中心にフリートーク形式で討論していく予定である。

長らく英国のカルチュラル・スタディーズおよびフェミニスト・カルチュラル・スタディーズの研究を牽引してきたアンジェラ・マクロビーであるが、その著書が日本語で紹介されることはこれまでほぼなかった。しかし、2009年に出版された“The Aftermath of Feminism: Gender, Culture and Social Change”のなかでマクロビーが明確に再定義した「ポストフェミニズム」概念は世界的に注目を集め、日本のフェミニズム研究の中でもしばしば言及されるようになってきた。本パネル・セッションでは2010年代のマクロビーの思考と研究について参加者のみなさんと共有し、いまこの場所で必要な実践的言葉を研ぎ澄ませていくことにしたい。

■登壇者 (50音順)■

川口遼 東京都立大学子ども・若者貧困研究センター

河野真太郎 専修大学国際コミュニケーション学部

田中東子 大妻女子大学文学部

中村香住 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程

梁・永山聡子 早稲田大学文学学術院非常勤講師

and more...

6/26 14:40-16:40
ルーム 1

英語セッション



Chair

Shinji Oyama
(Ritsumeikan University)

Panelists

Kyoko Shoji Hearn (Senshu University)
ILINA Olga (Graduate School of Tsukuba University)
Shinji Oyama (Ritsumeikan University)
Mooney, Suzanne (Tama Art University)

Panelist 1 Kyoko Shoji Hearn

Disability and Prosthetic Interdependency in *How to Train Your Dragon*

This paper investigates how the Dream Works animated film *How to Train Your Dragon* (『ヒックとドラゴン』2010) provides a new vision of disability and interdependency in its representation of human/animal relationship. The film narrates how the boy protagonist Hiccup, who yearns to be a heroic Viking just like his father Stoic, attains a new type of leadership with the aid of his pet dragon Toothless. The film is pervasive with disabled characters including Hiccup and Toothless. The boy accidentally disables the dragon with his handmade weapon. He later befriends him, building a prosthetic tail wing for him and rides him. Hiccup's partially guilt-ridden effort to nurture the crippled dragon eventually disrupts the normalized human/dragon relationship in the Viking world, that is, humans have to control the uncontrollable power of dragons and if necessary, kill them. Instead of slaying a dragon, the protagonist finds in its disabled body his own imperfection. Toothless's mutated tail wing mirrors the boy's incapacity to live up to an ableist/masculinist Viking ideal. The prosthetic partnership between Hiccup and Toothless is solidified when the boy loses his leg at the end of the story. Tying themselves to each other with their artificial body parts, they embody a new human-dragon solidarity based on interdependency.

This paper observes how the film utilizes disability and the “prosthetic interdependency” (the term coined by David T. Mitchell's and Sharon L. Snyder) between humans and dragons. While imposing a flawless Viking self in the practice of dragon slaying functions as a normalizing power, exposing disability through the act of prosthetizing is a resistance against normalcy, as well as an attempt to seek an alternative relationship with cultural others (dragons) based on imperfection and prosthesis. Although the idea of training dragons and turning them from the pests to humans into their pets is ultimately exploitive, the film still provides us ways to examine how our perception of cultural otherness is shaped and reshaped in the contemporary narratives through the tropes of disability.

Panelist 2 ILINA Olga

The Wrong Side of Emancipation:

Conservative Russian Feminism in The Novels of Viktor Pelevin

Every August, with rare exceptions, for many years in a row, a popular Russian writer Victor Pelevin has published a novel. In them, he gives readers a panoramic picture of the events of the current year, presents to the attention of the audience a variety of views on pressing problems of our time. He also does not bypass feminism, the attitude towards which in Russia is becoming more and more wary of the pro-government structures every year. In his novels readers can meet a man's fear of a strong woman ("a woman with balls"), can find worries and sarcasm towards liberal Western feminism, which are characteristic of the conservative strata of Russian society. In the best traditions of realism, the writer describes the plight of the average poor woman in modern Russian society, when she is forced to depend on status men and have time to receive benefits from them, only while she is young and in

demand in the market for "brides". The heroine of his latest novel is a 30-year-old wealthy woman who travels the world before the start of the coronavirus pandemic and learns its esoteric secret. Thus, in the last novel, readers get the opportunity to look at the world through the eyes of a modern Russian woman, financially independent and moderately emancipated. In her person, Pelevin portrays the modern Russian pro-liberal, pro-Western intelligentsia, and it is interesting to analyze what features this collective image possesses in order to understand what the most active and educated part of Russian society is. Particular attention should be paid to the fact that the narrative in Pelevin's last novel is conducted from the perspective of a woman, which is also very remarkable.

Panelist 3 Shinji Oyama

Cultural Workers in Japan: getting in and moving up?

Japan has built a reputation as one of the major forces in global cultural production. Its game, animation, fashion, and music have left a distinctive mark on global popular culture. Consequently, the number of books and articles on Japanese popular culture is increasing; nevertheless, there are very few studies on the issue of workers in Japanese media and cultural industries. The lack of such research is in contrast to growing attention to various aspects of cultural work amongst scholars of critical media and cultural studies globally. This paper attempts to map out the distinctiveness and some of the most critical issues concerning workers in Japanese media and cultural industries. In particular, the paper examines the uneven distribution of opportunities across gender, class, education, and other types of social capital in the process of recruitment (getting in), working practices, and other HR-related practices (moving up). This paper will reveal often-neglected tensions and fissures that exist within the Japanese creative industries to analyze the issue of power and inequality that are at the same time significant differences from the one that is considered the norm in the literature in the Western research on cultural work.

Panelist 4 Mooney, Suzanne

The importance of "being"—questioning the value of authentic experience as depicted in photographic images

This presentation discusses an on-going photographic and video series, titled *Out of Time and Place*, in which a figure is repeatedly photographed in various natural or constructed landscapes. Each scene is framed and shot to produce a large-scale photographic print or video vignette depicting the scene, alluding to an actual experience of being in each place. However, in the latest incarnation of the work, there is no location and there is no person as all the elements are computer-generated. This presentation explores how the absence of any "real" person or place affects the authenticity of this series, and how the viewer coming to this realisation during the act of viewing could be read as deceptive or inauthentic.

Throughout the, to date, sixteen years of production, the importance of authenticity in the making of this work has been a point of debate, and the latest artwork in this series, *Out of Time and Place 2020*, is an attempt to address such emphasis on the real or actual being in each place directly through praxis. *Out of Time and Place 2020* uses a CG avatar and real-time rendered virtual environment in place of an actual person and place, and is presented in the form of an exhibition, exhibiting the virtual and documented imagery side-by-side without any clear indication of their differences in origin. The new, rendered visual work mimics, and to some extent blends into, the *Out of Time and Place* series. This presentation will present and discuss a number of the issues raised or resolved in the series to date, such as the inherent documentary nature of photography and the difference in viewer expectation and experience between documentary and virtual, computer-generated imagery.

6/26 14:10-15:40
ルーム 2

アート・クラフト

あ文



Chair

狩野愛
(静岡大学)

Panelists

片倉葵 (東京都立大学大学院) 沖田愛有美 (金沢美術工芸大学大学院)
宮津大輔 (横浜美術大学)

Panelist 1 片倉葵

メディアとしての紙小箱がもたらした大正期の新しい生活文化様式と消費体験の変化について

本発表の目的は、大正期の大衆・消費社会の印刷技術の発展により登場した紙小箱と、それを手にした消費者にもたらされた社会的経験と消費体験の関係性を明らかにすることである。

大衆・消費社会の誕生した大正期に登場した紙小箱というパッケージは、それまでの商品を包むモノだけでなく携帯可能なメディアとして受容され現在に至る。紙小箱を用いた商品の事例として、大正期の生活文化に登場するようになった西洋文化の中でもキャラメルという西洋菓子を取り上げる。新しい食べ物であるキャラメルが人びとの手に行き渡るためにされた工夫の一つに「ポケット入」、「ポケット用」といった名称で呼ばれた規格の紙小箱が存在する。これは当時主流であった和装では懐や袖口、普及し始めていた洋装ではポケットやハンドバッグに忍ばせられ、商品をいつでもどこでも楽しむことができ、中身がなくなれば外出先で捨てて帰るといった新しい消費体験を人びとに与えた。

紙小箱で販売するキャラメルにハイカラさを抱き、従来日本に馴染みのあった飴菓子が西洋菓子の販売手法を逆輸入的に用いた。それによって、既存の飴菓子は味や食感の親しみやすさに加えて、容器の携帯性と紙小箱の図案の多様化や扱う動作など西洋菓子と同様の真新しさを体験することが可能となり、人びとの生活文化により浸透していった。大正期には飴菓子、西洋菓子共に、ポケットに収まるサイズの紙小箱が多数販売された。紙小箱という小型化した容器が、新しい文化である西洋菓子から既存の飴菓子にまで用いられ、独自の消費体験をもたらす物質文化としての側面を持つメディアとして日本の菓子だけでなく人びとの生活文化にもたらした影響は大きい。そこで、大正期の菓子文化の興隆と新しい紙小箱というメディアとそれを手にした人びとの社会的経験や消費体験との関係性を明らかにする。

Panelist 2 沖田愛有美

東アジアにおける漆画の誕生とクレオール性

——ベトナム・中国・日本における近代化と漆芸文化の混交をたどって——

長い伝統を持つ東アジアの漆芸文化のなかには、ベトナムの「Sơn mài」、中国の「漆画 (qīhuà)」、日本の「漆パネル」など、19世紀以降に近代化の影響を受けて成立した絵画表現が存在する。各国がそれぞれ異なる背景をもち近代化してゆくなかで、伝統的な漆工芸の技術と西洋美術との融合により漆の絵画表現 (以下漆画と呼ぶ) が生み出されたのである。この同時代的な現象を、個別の国々が非純粹美術の側から純粹美術への接近という形で、新たなる絵画表現の誕生を成し遂げたという発展性を強調し記述するのではなく、国家間の関係や人物の交流を参照し、漆画の成立過程を東アジア地域における文化のクレオール性という視点から捉えかえすことが本発表での試みである。

ベトナムの漆絵は1920年代から1930年代にかけてフランスの植民地支配下のベトナムで両国教師の協力のもと漆芸と西洋画との融合によって生み出された。1960年代に上海と北京の展覧会に出品されたベトナム漆絵は中国の漆芸界に大きなインパクトを与え、以降の中国漆画は装飾絵画から純粹美術へと自立することを目指した。日

本における漆パネルはあくまでも工芸領域において展開されたが、日本の漆芸家は1910年代から1930年代にかけてベトナムや中国の伝統工芸とも活発な交流を持っていた。こうした東アジア地域において漆芸が平面形式を獲得してゆく動向のなかで、植民地支配下に成立した漆絵とその伝搬、産業芸術と参照すべき伝統、19世紀初頭のパリ万博とジャポニズムなどに着目し、ポストコロニアルの観点から漆画成立の背景を確認してゆく。漆という材料は近代的な工芸の分類のなかに配置されたことで、絵画と工芸、純粹美術と非純粹美術、伝統と革新など対立する側面を生み出した。これまでに国を問わず多くの作家たちの手によって様々な漆画のあり方が模索されてきたが、今度はそうした分類を超えて漆で絵を描くということに向き合う実作者の一人として、発表に臨みたい。

Panelist 3 宮津大輔

製陶における芸術と産業の止揚

——小森忍による建築陶材内装や西洋食器の東洋化を事例に——

陶芸家・小森忍（1889～1962年）は、大学卒業後に京都市立陶磁試験場で、場長・藤江永孝からワグネル仕込みのドイツ式燃焼論と築窯技術を徹底的に学んでいる。

その後、満鉄中央試験場の窯業科に移り、中国古陶磁の釉薬や焼成に関する研究とその工業的応用に没頭、1921年には自ら旬雅堂窯を現地で設立している。

1928年に愛知商品陳列所の招きで帰国、瀬戸に山茶窯を築く。そこでかねてより構想中であった中国古陶磁の産業応用実践として、高島屋日本橋店の屋上噴水や現在のサッポロ・ライオン銀座7丁目店など内装陶製タイル、並びに「西洋食器の東洋化」に取り組む。建築内装は高く評価されていたものの、食器に関しては硬度、軽量化、廉価な価格帯には程遠く、評判は芳しいものではなかった。

次いで小森は、名古屋製陶へ入社。ドイツから最新鋭機を多数導入し、ディナーセット月産375トンの生産能力を誇る鳴海工場建設を指揮する。しかし本格的な西洋食器製造は、工場完成翌年の米国対日輸入禁止令発動により、またもや頓挫してしまう。

陶芸家としての小森は、京都市立陶磁試験場時代の後輩である河井寛次郎や濱田庄司の後塵を拝しているといえよう。しかしながら、クリエイティブなエンジニアあるいは空間デザイナーとしての側面を含め、再評価されてしかなるべき存在であろう。

高価な陶芸作品にのみ拘泥せず、芸術性の高さはそのままに手軽で生活へ取り入れやすい建築陶材や日用雑器にこそ、小森の真摯で卓越した創作姿勢を見てとることができる。こうした点を、後に「満鉄マルクス主義」を生み出す満鉄中央試験所の自由闊達な気風や、「大正デモクラシー」を反映、あらゆる階層が活発に論談を楽しんだライオン・ピアホールの独特な空気など、小森を取り巻く環境や時代背景と共に論を展開する。

本発表は規範的な工芸史のナラティブとは異なり、当時の政治・社会的文脈と結びついたオルタナティブな視点を提示するものである。

6/26 14:10-15:40
ルーム 3

裏日本の芸術学のポストコロニアリティ

あ文



Organizer

菊池裕子
(金沢美術工芸大学)

Panelists

清水冴 (金沢美術工芸大学)
長谷川ななみ (金沢美術工芸大学、ESMOD JAPON)
神野元次郎 (金沢美術工芸大学)

金沢美術工芸大学の芸術学にはこれまでにない文化颯風が上陸している。ロンドン芸術大学で世界的に名の知れた TrAIN (トランスナショナルアート研究所) 出身の教員達がなぜか裏日本の魅力に惹きつけられて漂着し新しい実験を行い始めた。芸術学という名称は1世紀前以上に輸入した西洋美学の名残を残すものであるが、変わらぬ表皮とは裏腹にその内状は時と共に変わり再生を繰り返している。本パネルでは現在の芸術学専攻の3人の学生による萌芽研究を紹介し、裏日本だから見える文化の政治性を提案する。

Panelist 1 清水冴

日本軍『慰安婦』問題を巡るニュー・アートヒストリー：

富山妙子からあいちトリエンナーレ2019まで

日本における「慰安婦」問題をテーマとした作品の変遷を辿る。80年代の富山妙子、90年代の嶋田美子やイトー・タリー、2000年代の碓井ゆいや毒山凡太郎、あいちトリエンナーレ2019の『平和の少女像』までの系譜を再考察し、日本社会およびアートワールドを支配するナショナリズムや排外主義、男性中心主義の問題を論じる。

Panelist 2 長谷川ななみ

social jewelry: 拡張されたジュエリーの現在地

本論文では、領域と意味が拡張され続ける新たな価値形態のジュエリー「new jewelry」について考察する。今日の現代美術を特徴付ける傾向の1つである「ソーシャル・プラクティス」を取り入れたジュエリーに「social jewelry」というカテゴリーを独自に設立し、その特徴的な例証を取り上げてジュエリーという媒体の性質や可能性を論じる。

Panelist 3 神野元次郎

九鬼周造の求めた『日本的なるもの』——論文『日本的性格』の再考

本発表では、九鬼周造が晩年にしたためた論文「日本的性格」を取り上げ、その理論的背景に彼の「精神上の父」岡倉天心の影をみとめつつ、ファナティックなナショナリズムとは一線を画する日本文化の内なる覚醒の意義を再考する。九鬼の生きた時局を注視しつつ、彼の求めた「日本的なるもの」とは何だったのかを探る。

6/26 14:10-15:40
ルーム 4

女性研究

あ文



Chair

菊地夏野
(名古屋市立大学)

Panelists

加藤穂香 (国際基督教大学大学院) 依田ひかり (京都大学大学院)
石川真知子 (駿河台大学)

Panelist 1 加藤穂香

日本のオンライン・フェミニズムと「権力」： 「盛り上がらなかった」#MeTooを考える

近年、Twitterをはじめとするオンライン空間で行われるフェミニズム運動が顕著になっている。その一例として、ハリウッド俳優のアリッサ・ミラノ氏のツイートをきっかけとして、2017年にアメリカから世界に広まった#MeToo運動がある。特に欧米では、ハッシュタグを通じて自らの性被害体験を公にしたり、性暴力や性差別に反対したりする動きが活発になり、#MeToo運動はフェミニズムにおける重要なモーメントとなった。一方日本においては、ブロガーのはちゅう氏のように自らの被害を告発し、#MeTooの波に続く人々は現れたものの、運動が他国ほど「盛り上がらなかった」という声もある。日本で#MeToo運動が「盛り上がらなかった」理由の一つとして、特にオンライン上における告発者へのバッシングや誹謗中傷が、告発や連帯を妨げ得るということが、メディアや学術研究等で議論されている。

本発表では、近年の代表的なオンライン・フェミニズム運動とも言える、#MeToo運動に改めて注目し、日本の事例をめぐる「権力」について考える。考察にあたっては、ラクラウ＝ムフのヘゲモニー論を用いて、日本の#MeToo運動における「等価性の連鎖」や「空虚なニフィアン」について議論しつつ、オンラインにおけるフェミニズム的連帯を妨げるナショナリズムや情動的要素についても論点を提示したい。日本における#MeTooが一つの社会運動（ムーブメント）として拡散されにくかった背景には、個々の被害者や支援者の声をまとめきれない「ヘゲモニー」の欠如と、家父長的な「権力」構造があると考えられる。

#MeToo運動が始まってから既に4年近くが経過し、日本では#KuToo運動など新たな動きも生まれているが、今一度日本の#MeToo運動をめぐる「権力」を明らかにすることで、日本のオンライン・フェミニズムを取り巻く課題について考えたい。

Panelist 2 依田ひかり

「美」の表象と創造——インドネシアの美人コンテストにおける各州代表制の成立過程に関する考察から——

美人コンテストは近代西洋で誕生し、美を競い合うことを開催目的として世界各地に普及したイベントである。他方で、各国の国内大会の様式やテーマ、表象形式には差異が存在する [Cohen et al, 2013]。インドネシアでは、多くの国内大会が、それぞれの州に代表者を立てる「各州代表制」を採用する。先行研究は、美人コンテストを「美の陰謀論」の象徴的事象として批判した [Flaudi, 1992; Wolf, 1991]。一方、これらの研究は大会形式や選考過程などコンテスト自体に着目してこなかった。本研究は、各州代表制の成り立ちに関する分析から、支配的な大会形式が美人コンテストを批判するナラティブの継承とメディア技術との相互発展によって決定されてきたことを考察する。

植民地期から同国では、美人コンテストが土着文化に合わないという反対する意見が社会的に根強かったため、スハルト体制期において政府は美人コンテストに規制をかけた。大会の継続を図る主催側は、単に美を競うのではなく、スハルト政権が作り上げた文化表象の形式である1州＝1 エスニック・グループという擬制を取り込んで、

参加者に民族衣装を着させるなど参加州の美しい文化を競演させる大会作りを始めた。

さらにエスニシティを行政単位で標準化するこの表象形式は、スハルト体制後期におけるメディア発達の追い風を受けて、主催側に活用された結果、州ごとに美の代表者を立てる「代表型」が誕生した。1998年に民主化したインドネシアでは、表現の自由が保障され文化の再発見とアイデンティティの多様化が進んだものの、コンテストの選考過程では民族的多様性を少なくとも反映した仕組みとして代表型が生き残り、参加州を拡大させ、今日見られる「各州代表制」へと発展した。

以上の議論を踏まえ、本発表では、同国における美人コンテスト発展の系譜が家父長的イデオロギーや異性愛規範が与える影響に焦点を当てた既存の視点では捉えきれないこと、すなわち「美の陰謀論」の限界を提示する。

Panelist 3 石川真知子

歴史小説におけるレイプ表象の問題点：

R・フラナガンのアボリジナル少女の物語 *Wanting* (2008) から読み解く

本発表は、実在のタスマニアン・アボリジナルの少女マシナ (1835-1852) を描いたリチャード・フラナガン (1961生) の小説『欲望』 (*Wanting*, 2008) をテキストに、歴史小説におけるレイプ表象について考察する。『欲望』は、現代の英文学を牽引する作家として知られるフラナガンが、故郷のオーストラリア・タスマニア島を舞台に、植民地時代のヨーロッパとアボリジナルという二つの社会に引き裂かれ、孤独な死を遂げたとされるアボリジナルの少女の一生を描いた創作 (フィクション) である。

ポカフォンタスやサラ・バートマンに関する作品にも明らかであるように、被植民化された無告の女性を読者の想像の範囲にもたらそうとする作業には、魅惑的なフィクションの創出がつきものであった。無告の被植民者をいかに表象するかという問いかけは、ポストコロニアル文学批評において最も重要なテーマである。スピヴァクは「南のもっとも貧しい女性」の声を知識人が表象することの (不) 可能性を論じている。これは、サバルタン (従属的階級に属する者) の表象に取り組む研究者たちが、いつもその過程で「サバルタンの主体のたどる道程が代表する知識人にとって魅惑の対象となるふうには痕跡を残してこなかった」ことを思い知り、表象の方法を見失うことにいたることを指している。作家のフラナガンが独自のマシナの物語 (具体的には、物語のクライマックスに起きる白人養父からの「レイプ」) を創作することは、サバルタン表象の (不) 可能性を無視し、文学作品としての芸術的高みから、劇的な物語の創出を正当化しているといえるのではないか。この歴史小説は、植民地時代とその投影としての現代における「レイプ・カルチャー」を映し出し、再生産しているのではないか。本論文では、このような表象の「暴力」について考察する。

6/26 15:50-17:20
ルーム 2

アートプロジェクト

あ文



Chair

光岡寿郎
(東京経済大学)

Panelists

山下里加 (京都芸術大学アートプロデュース学科) 楊淳婷 (東京藝術大学)
松尾加奈 (東京藝術大学) シルマン・タニヤ (東京藝術大学大学院)

Panelist 1 山下里加

転生する若者たち 就労と移動に関する語りから

近年の日本では、特に地方において少子高齢化、過疎化が進む一方で、若者世代が都会から地方へ移り住む事例

も増えてきている。地方自治体も若者の就労の機会を積極的につくり、「まちづくり」を目的とした雇用の場を設置したり、自治体が関与する地域型芸術、地域型アートプロジェクトなどで若者の就労の場としても機能している。芸術大学に勤務する筆者は、教え子たちをこうした「まちづくり」「アートの現場」に送り出して来た。

筆者は、2019年より瀬戸内国際芸術祭の会場となる香川県小豆郡土庄町豊島で、芸術祭のスタッフとして雇用された若者に聞き取り調査を行ってきた。また、IT企業のサテライトオフィスの誘致に成功し、地域創生の成功例とされる徳島県名西郡神山町でも都市部から移動してきた若者への聞き取りを行っている。

それらの聞き取り調査から、ほとんどの若者は過疎地に定住する意志はなく、再び移動することを想定しているという傾向を掴んだ。また、期限の区切られた非正規雇用であることを積極的に選んでいる若者も多い。これまでの就労に関する研究では、人々の移動は、より良い給与や仕事内容、自分の望む人間関係を求めることで説明されてきた。だが、本論文で注目する若者は、必ずしもそれらに不満があるわけではなく、ある地域で得た「経験・学び・キャリアがある仕事」、あるいは「住み慣れた・愛着がある・人間関係がある地域」から切り離された、不連続の仕事や地域をあえて選び、移動していく。しかも、比較的、学歴や能力の高い者が移動を繰り返す。その様子は、まるでライトノベルや漫画などで描かれる「異世界転生」のようである。

本調査では、彼らの行動・価値観を彼らの語りによって明らかにする。尚、現在も聞き取り調査を続行しており、本発表は中間報告として行う。

Panelist 2 楊淳婷 松尾加奈

協働的な創作プロセスにおける複数性

——アートプロジェクト「東京で（国）境をこえる」を事例に

本研究は、芸術運営の見地から、協働的に芸術活動／芸術作品を創作する仕組みについて再考するものである。近年、多様性が求められる社会的な要請から、現代美術、演劇やコンテンポラリーダンスなどの分野において「集団創作（コレクティブ）」が着目されつつあり、1つの芸術活動／芸術作品に複数の観点を併存させる参加仕組みの構想を目指すことがうたわれるようになってきている。しかし、特定のリーダーを持たない「フラット」な創作は、個々人の考えを反映し、協働的なプロセスを優先することが可能である反面、作家の署名性が集団の複数性に代えられて「作品のクオリティーを担保する責任者の不在」というジレンマを内包する。本研究は、上述した二面性を併せ持つ協働的な創作活動について論じ、創作活動に関わった1人ひとりが「個」として生かされながら互いにゆるやかにつながる可能性、すなわち創作プロセスにおける複数性を実現する要因を明らかにすることを目指している。

本研究が言及する事例は、アーツカウンシル東京の助成を受けて、2019年にスタートしたアートプロジェクト「東京で（国）境をこえる」である。当該プロジェクトが2020年度に実施した「kyodo20_30」という企画は、公募を通じて集まった、多様な文化的背景を持つ20代から30代の若者が、「経堂」を拠点にワークショップなどを通して「協働」し、(表現形式を問わない)クリエイティブなアウトプットを試みるものである。プロジェクトディレクターの矢野靖人は、演劇の国際共同制作の演出家として作品創作の中心的な役割を担う傍、「東京で（国）境をこえる」では脱中心化した集団創作のあり方を模索している。本研究は演劇の文脈や潮流に関する文献調査を軸に据えて、異なる創作手法を行き来して活動する矢野へのインタビュー、及び当該プロジェクトの参与観察を基に考察・分析する。

Panelist 3 シルマン・タニヤ

日本のストリートアートの現在——ライブペイント、グラフィティと壁画プロジェクトに関する考察

近年世界中で、ストリートを起源とするグラフィティ展が増え、バンクシーの様なストリートでゲリラ的に活動している作家も注目を集めている。この様な状況の中で日本でのライブペインターやグラフィティアーティストはあまり大きな扱われ方や注目をされにくい。

現在のストリートアートは、イリーガルなもの—ゲリラ的に街中で行う表現行為（グラフィティ、ステッカーなど）と、リーガルなもの—クラブや音楽イベントで見られる所有者、管理者、地域から認められている計画的なリーガ

ルウォールと壁画プロジェクト、またはライブペイントに分けられる。日本では地域や建造物管理者に認められるプロジェクトは非常に少なく、表現の場としては厳しい状況が続いている。日本での厳しい管理状況から、目にする機会も少ないため、一般的な認識や慣れに繋がりにくい点からも、厳しい評価を受けやすい。そういった世界のなかで世間一般で知られるアイドルの様な扱いをされるバンクシー、バスキアなどのアーティストは評価されている。一方で日本人のストリートアーティストとしてのアイドルはまだ存在していなく、ストリートアーティストは他の国よりも非常に描きにくい、売りにくい、展示しにくい状況が続いている。

この発表の目的は、日本のライブペイント、グラフィティと壁画プロジェクトを紹介しながら屋外の壁画プロジェクトと都市計画の可能性を考察することである。日本国内のライブペイントやグラフィティの様な、美術館の中ではなく、屋外で突発・単発的に描かれ、展示されるアートの調査分析や考察を通して新しい美術の解釈・展示方法に繋がればと考える。

6/26 15:50-17:20
ルーム 3

文化と農村——実践者に注目して

あ文



Organizer

森田のり子
(東京大学大学院)

Panelists

森田のり子 (東京大学大学院) 目黒茜 (筑波大学大学院)
佐藤知葉 (筑波大学大学院) 宮部峻 (東京大学大学院)

文化の意味の結び目を解きほぐすと、「実践としての『耕作』の場」(佐藤 2018: 45) に行き着くことは、佐藤健二が指摘してきた通りである。にもかかわらず、その具体的な生産の場である「農村」と文化という主題は、カルチュラル・スタディーズ、文化社会学において正面から取り組まれることは少なかったのではないかと。本テーマ・セッションは、「文化と農村」を主題とし、農村の変容が重要な課題として認識された1930年代から1950年代の日本において、農村と「文化的なもの」が持った関係性について、問題提起する場としたい。今回の作業として、宗教者、女医、栄養科学者、記録映画製作者の実践活動を取り上げる。

宮部は、真宗大谷派教団を事例に、1930年代から50年代にかけて、農村と宗教の問題がどのように問われてきたのかを検討する。特に、1930年代における教団の社会事業と農村の関係性を考察し、加えて、戦後の社会変動に教団が対応するなかで、農村と宗教の関係が教団の関係者の間で問われていく過程を論じる。

目黒は、戦中期に東京女子医学専門学校で学び、戦後に農村地域において医療を広めていった女医の活動を考察する。1950年代において農村でいかなる医療が必要とされ、どのような存在として女医が農村に受け入れられていったのかに着目する。

佐藤は、栄養科学と給食事業の展開を取り上げる。冷害や凶作が生じたことによって、給食事業や共同炊事の必要性が盛んに議論され始めたことに着目し、栄養科学者が農村の食の生産と消費に携わる過程で、農村の現状をどのように認識したのかを検討する。

森田は、1930年代から1950年代までの記録映画製作者の間で、戦時をまたいで「農村」が撮影対象として注目され続けたことについて論じる。製作者らが経済更生や農作業の近代化といった社会問題を、なぜ積極的に映画で記録していったのかを考察する。

参考文献

佐藤健二, 2018, 『文化資源学講義』東京大学出版会。

6/26 15:50-16:50
ルーム 4

現代日本における人外女性像——国境とメディアを越境するジェンダー表象を巡って——

あ文



Organizer

ESCANDE, Jessy
(大阪大学大学院)

Panelists

ESCANDE, Jessy (大阪大学大学院)
PAWEŁ, Pachciarek (大阪大学大学院)

なぜ時代と文化圏を超え、人でない姿で女性を表現する傾向が見られるのか。それは、女性であってこそその表象であると考えられるが、その本質は何であろうか。人間の女性の描写で表現しにくい言動と性に関わるタブーを乗り越えるための方法として、ジェンダー論の視点から問う。日本戦後に重点をおいて、草間彌生が受けた泉鏡花の『高野聖』の影響から、現在日本のポップカルチャーにおいてブームとなっている〈人外もの〉の二つの事例を取り上げる。

一例目。現在、日本人女性美術家の中で最も高い人気と世界の注目を得た草間彌生を挙げる。美術に加えて、今日では殆ど知られていない文学活動における、男性や社会に放置され、脅かされた女性の描写を紹介する。その女性の真の姿は人外で、怪奇な妖魔であり、強迫幻覚からもたらされることは珍しくない。鏡花のファンである草間は悲惨な女性の歴史をフェミニズムの表象として描いたのではないだろうか。

二例目。日本のポップカルチャーにおいて人外表象、とりわけ女性の人外表象が増え、一ジャンルを形成するほどの傾向にある。ジャンルとして、人間でないキャラクターが登場するだけでなく、人外と人間の、主に男性の主人公の接し方がポイントとなる。二人の人間の場合、取り扱いにくい人間関係、とりわけ男女関係の問題、またはタブーを避けるための表現方法として解釈し、人気作品を参照しながら日本ファンタジーの独自の転覆性を考察する。

6/26 16:50-17:50
ルーム 4

パンデミックにおけるフィールドワーク演習の挑戦

あ文



Organizer

田沼幸子
(東京都立大学)

Panelists

田沼幸子 (東京都立大学)
深山直子 (東京都立大学)

発表者たちは、2016年以降、大学においてフィールドワークの授業を行ってきた。一年かけて、講義、文献購読、授業内の模擬インタビューなどを経てから、参与観察やインタビューを個別に行い、その成果を議論し作品化する形式である。また、スマートフォンを用いた映像作品の作成によって、彼らの視点や関心を可視化し、クラスで共有してきた。

昨年4月が休講となり、5月にオンライン授業が始まることになった時、これらをどのように再現することができるかは未知数だった。結果から言えば、思いのほか充実した演習となった。インタビュー対象は、いつも一人に対してだが、今年はとりわけ家族へ、それまで聞けなかったことを深く掘り下げた内容が多かった。また、慣れ始めたZOOMによって、近くの友人だけでなく、本国に戻った留学生に話を聞くものなど、新しい日常に即した調査が見られた。10-11月は、参与せず、遠巻きに観察した情景を報告するという課題を行なった。また、この前段階に、オンライン授業中に、同じ映像を見て、その情景を描写し、書き方を比べ合うことによって、記述

にはそれぞれの個性が強く現れることが理解された。映像の課題は、スマホで撮った映像を大画面でみることによる発見があるため、12月にはハイブリッド授業とした。教室にいる人はお互いにざっくばらんに雑談のようなコメントができる一方で、オンライン参加だとチャットで感想を即時に反映できるというメリットがあることも発見だった。最後に授業の一年を振り返る相互インタビューは、例年、カメラにピンマイクをつけて撮影する。しかし今回はそれが叶わなかったため、ZOOM録画を用いた。苦肉の策だったが、普段通りの場所からだったためか、リラックスしつつもよく考え抜かれたインタビューがなされた。試行錯誤の軌跡を授業の映像も交えながら振り返り、同じような課題を持つ方々と共有したい。

6/27 9:30-11:00
ルーム 1

ポピュラー文化と表象

あ文



Chair

藤田結子
(明治大学)

Panelists

山本恭輔 (千葉大学大学院) 酒井美優 (関西大学大学院)
松浦優 (九州大学大学院)

Panelist 1 山本恭輔

Car "race" and "gender"

擬“車”化された多様性表象で再生産される白人男性優位性

本研究は、子ども向けの米国のアニメーション映画作品において、多様性を表象しようとする試みが、どのように白人性、男性性の脱構築や再生産をもたらすかを明らかにすることを目的として、10年に渡る同じシリーズ内の映画3作品での表象の変化や製作者の語りを分析する。

グローバルな大衆文化として影響力を持つウォルト・ディズニー・カンパニー傘下の昨今の映画作品の表象は、2010年代以降特に多様性を取り入れるように変化してきている。ジェンダーの観点からは女性主人公の作品における女性性の変化については多くの研究が行われてきており、また人種の観点からはマイノリティを形式的に含めることを批判するトークニズムの議論は多くなされている。他方で、男性主人公の作品について、マジョリティとしてその特権性を透明化させる白人性の観点からの分析はさらに進める必要がある。

本研究では、アメリカ南部を舞台に自動車だけを登場人物として描く、ディズニー配給ピクサー・アニメーション・スタジオ製作の映画シリーズ *Cars* (『カーズ』) を分析対象に、白人男性を表象する車の主人公を取り巻く非白人や女性の描かれ方がシリーズを通してどのように変化するか、またその変化の背景を製作者がどのように語るかを分析することを通して、表象の背景で脱構築・再生産される白人性のイデオロギーを明らかにする。

分析からは、(1) 周縁化される非白人や女性がステレオタイプ的な描写により本質化されていくこと、(2) 監督のセクハラ告発や社内でのジェンダー表象の問題提起を踏まえた2017年の作品では前2作に比べて女性の表象頻度が高くなり、同時に非白人の表象が変化したこと、(3) 部分的には脱構築される白人男性の優位性が結果として維持・再生産される構造が明らかになった。世界展開されるメディアにおいて非人間を媒介して描くことが、白人性をより一層見えづらいうものにし、普遍化させ得ることが指摘される。

Panelist 2 酒井美優

ライトノベルにおける「強い女性」の表象

——男性読者の願望としての「男らしい弱みと強みを備えた美少女」について

本発表は、近年の男性向けライトノベルにおいて、その多くが男性を主人公としつつも基本的に女性が「強い存在」として描かれやすいことに注目し分析することを目的とする。ストーリーの展開上、物語を牽引するのは概ね女性であり、男性は主人公でさえ能力的・気質的にヒロインに追従する、或いは巻き込まれる形で物語に参加するケースが多い。男性キャラクターは女性キャラクターに比べ活躍の場に限られるだけでなく、キャラクター数自体も少ない傾向にある。これは主な顧客層である男性読者の性的な需要も含む要望に応えた故の特徴であり、単純にジェンダーフリー的な表象とは言い難いが「強い女性」という表象を考えるうえでは無視すべきではない文化現象として分析した。題材としては、宝島社発行の雑誌「このライトノベルがすごい！」(2004-2020)による人気投票において上位にランキングされた作品における女性キャラクターを題材に Bem, S. L. (1974) が作成した性役割の尺度である BSRI を参考に、彼女らの描かれ方を分析した。結果として、メインキャラクターの女性比率が高い状態で男性人気の高い「バトルもの」や「立身出世もの」といった物語が展開された結果、女性の一部が男性的とみなされがちな「リーダーシップ」や「自立心が強い」といった美点を持つ一方、欠点として「支配的性格」や「人に頼れない」等の欠点もまた男性的であり、その点を主人公にフォローされることが明らかになった。隣接分野である少年漫画においても男性に負けず劣らず活躍する「強い女性」表象は多数登場するが、ライトノベルにおける「男性的な役割を担いつつも男性読者に性的に欲望される女性キャラクター」というある種中性的で独特な表象は複雑な男性の要望をとりこんだライトノベル独自のものといえる。

Panelist 3 松浦優

性愛表象のアセクシュアルなオーディエンス：

仲谷鳩『やがて君になる』の分析から

近年のアセクシュアル (asexuality) に関する研究や運動のなかからは、正常な人間ならば他者へ性的に惹かれるのが当然だという思い込みを批判する概念として、強制的性愛 (compulsory sexuality) や性愛規範 (sexual normativity) などが提起されている (松浦 2020)。また、アセクシュアルの観点からメディア表象を読み解くという研究も徐々に蓄積しつつある。

本報告では、このような研究動向を踏まえながら、仲谷鳩によるマンガ『やがて君になる』を分析する。『やがて君になる』は女性同士の恋愛を描いた作品であり、「人に恋する気持ち」が分からないという悩みを抱える主人公の恋愛物語である。表面的には、恋愛感情を抱けなかった主人公が最終的に恋愛へと回収される物語にも読めるが、作中では恋愛感情を抱けない状態は、同性愛が「抑圧」された状態としては描かれていない。さらに主人公以外に注目すべき要素として、他人の恋愛を観ることを好みつつ自分で恋愛することを忌避しているキャラクターが登場する。このような点に注目することによって、性愛に関して自明視されがちな想定を相対化している作品として『やがて君になる』を解釈する。そしてこの解釈に加えて、ジュディス・バトラーの理論を参照することによって、強制的性愛のもとで多様なアセクシュアル・スペクトラムが不可視化される事態を捉えられる枠組みを検討する。

松浦優, 2020, 「アセクシュアル研究におけるセクシュアルノーマティビティ (Sexualnormativity) 概念の理論的意義と日本社会への適用可能性」『西日本社会学会年報』18: 89-101.

6/27 9:30-10:30
ルーム 2

政治思想・社会運動

あ文



Chair

毛利嘉孝
(東京藝術大学)

Panelists

五野井郁夫 (高千穂大学)
下村晃平 (立命館大学大学院)

Panelist 1 五野井郁夫

キャンセル・カルチャーはデモクラシーを窒息させるのか？：

「正義と公開討論にかんする書簡」をめぐって

本発表では近年隆盛しつつある「キャンセルカルチャー (cancel culture)」や「ウォークカルチャー (woke culture)」について考察し、それら文化傾向がリベラル・デモクラシーの政治世界に如何なる影響を与えるのかを検討する。

「キャンセルカルチャー」「ウォークカルチャー」によってテレビメディアもインターネット上も、もはや「沈黙は金」という状態になりつつあり、多くの知識人は言論空間から撤退をするか、あるいはclubhouseのような後ろ向きの「消滅する媒介」へと移行しつつある。なぜならばSNS上の反対者は、自分が気に食わない相手に対しては、たとえ引用発言ですらも文脈をわざと外して抜き出し、燃やすための材料にするからだ。

2020年7月に英米圏の著名人153名連名でハーバース・バザー上に掲載された「正義と公開討論にかんする書簡」(以下書簡)は、近年#MeTooや#BlackLivesMatterといった社会正義を求める運動とともに隆盛しつつある「キャンセルカルチャー」「ウォークカルチャー」への憂慮として、議論に一石を投じた。イデオロギーへの服従が、オープンな議論や他者との違いを許容する既存のリベラルデモクラシーの規範を弱め窒息させる「キャンセルカルチャー」「ウォークカルチャー」という新たな一連の道徳的な態度と政治的なコミットメントを激化させていると警鐘を鳴らした。「書簡」は公開討論を制限することは、それがトランプ大統領のような抑圧的な政府によるものであれ、あるいは「キャンセルカルチャー」や「ウォークカルチャー」のような不寛容な社会によるものであれ、権力を持たない者を必ず傷つけ、誰もが民主主義への参加能力を低下させると危惧している。本報告ではこの書簡が公表された背景と現状の分析を通じて、今日どのような言論空間が必要とされているのかを考えてみたい。

Panelist 2 下村晃平

ネオリベリズムの変遷——「自由主義者か社会主義者か？」(1884) から

「ネオリベラル・マニフェスト」(1982) まで

ネオリベラルたちはいつから「ネオリベリズム」という用語を使うのをやめたのか。本発表では、近年の経済学史のアプローチをとるネオリベリズム研究を手がかりにしながら、(1)ネオリベリズムが意味する対象の変遷と、(2)ネオリベラルたちがその言葉を使用しなくなった理由、という二つの問題関心を中心にして、ネオリベリズム(という用語)の歴史を振り返る。

Covid-19による世界的パンデミックの最中にある2020年、日本共産党の書記長、ローマ法王、世界経済フォーラムの創設者が相次いでネオリベリズム批判を展開した。また、アカデミズムにおいても、「ネオリベラル」を題材とする論文・書籍の数は増加し続けており、ここ5年間では毎年3000本以上の文献が刊行されている。このような近年の動向は、ネオリベリズムが社会的にも学術的にも重要な問題であることを示している。

だが、ネオリベリズムという用語に対しては批判も数多くなされている。代表的な批判の一つは「ネオリベリズムとは批判者が自分の気にいらぬものにつけるレッテルであり、実際、主流派の経済学者たちはその言葉を使わない」というものである。しかしながら、ミルトン・フリードマンがネオリベリズムという用語を使

用していたように、ある時期までネオリベラルたちはその用語を使用していた。では、彼らはいつから「ネオリベラリズム」という言葉を使うのをやめたのか。

従来の社会科学でよく見られるのは、1973年のチリのクーデターにシカゴ学派の経済学者やその教え子たちが関与したことによって、ネオリベラリズムという言葉は負のイメージを帯びるようになったからという説明である。しかし、こうした説明はネオリベラル思想内部における重要な転換を見逃している。本発表では、経済学史家のフィリップ・ミロウスキーらが述べるように、1950年代後半に、モンペルラン協会の会員たちが古典的リベラリズムの教義との決別を主張しなくなったことが、ネオリベラルたちがネオリベラリズムという用語を使用しなくなった理由の一端であることを明らかにしたい。

6/27 11:10-12:10
ルーム 1

空間とエンターテインメント

あ文



Chair
近藤和都
(大東文化大学)

Panelists
余玖欣 (神戸大学大学院)
ロート マーティン (立命館大学)

Panelist 1 余玖欣

『シャーロック・ホームズ』から『霍桑探案』へ

イギリスの探偵小説家かつ評論家である G・K・チェスタトン (Gilbert Keith Chesterton, 1874-1936) は「探偵小説の本質的美点の第一は、それが現代生活の詩的感覚といったものを表現した最初で唯一の大衆文学であるという点にある」と述べた。そして、日本の社会学者内田隆三はチェスタトンが提示した現代生活＝都市生活と解釈し、探偵小説は近代都市と密接に関連しているものであると指摘した。

都市における表象については、現在の視点からすると、整備された道路、立ち並ぶ建物、綺麗なショーウィンドウ、洗練された衣装を着飾る人々、厳正な政策管理などが思い描かれる。たとえば、清末中国における『シャーロック・ホームズ』の翻訳者、模倣者、読者が経験した都市も、特に20世紀初頭の大都市上海に集中していた。当時における上海とは、「旧皇城」と「租界」に分けられていて、両極化した表裏両面の顔を持っていた。そして、ドイツの『シャーロック・ホームズ』が翻訳と翻案を通じて清末中国に旅行した際に、その翻訳者、模倣者、読者たちは近代都市ロンドンと近代性そのものに対する想像と解釈を経験した。

こうした背景のもと、本報告では、清末民初の代表的な探偵小説家であり、上海を中心に活動していた程小青 (1893-1976) の翻訳、パロディ、創作という一連の活動を取り上げる。このような都市への想像に焦点を当てつつ、程はドイツの『シャーロック・ホームズ』が清末に中国に翻訳された後、いかにして上海の発展の歴史的起源と文学の創作を組み合わせ、より複雑的な都市景観を形成するのかを検討する。まず、探偵と都市の関係を概観する。次に、程小青における『シャーロック・ホームズ』のパロディである『龍虎闘』を例として、清末における都市文化の崛起を論じ、このパロディと『シャーロック・ホームズ』の関係を論じる。最後に、程小青の『霍桑探案』を取り上げて、都市と近代性の概念と想像した中国の都市と結び付けることを試みる。

Panelist 2 ロート マーティン

デジタルゲームにおける「遊び」——『集まれ動物の森』を例に

遊びやゲームの魅力の一つは、それが日常生活から離れた「場」で繰り広げられることであることはよく指摘されてきた。程度や強度は様々だが、鬼ごっこ、演劇、ゲーム、スポーツなどの遊びや遊びに近い活動は、ルールやフィクションを用いて、「日常」と距離をおくことで成立すると言われてきた。だからこそ、そこで思考実験や別のルールに基づくインタラクションが可能になる。その創造性を背景に、遊びは文化の起源とさえ言われてきた (ホイジンガ)。しかし、近年、とりわけデジタルゲームにおいて遊びと日常生活がむしろ奇妙な形で融合してきているように見える。その要因として以下の点が挙げられる。

1. ゲームのサービス化による脱作品化と「生活空間化」
2. 遊びのゲーミフィケーションによる消費化
3. 遊びのネットワーク化、そしてソーシャルネットワークとの接続による拡張
4. コンテンツ共有プラットフォームによる遊びの「半公共化」

こうした中、デジタルゲームもまた、プレイヤーに選択肢を与える限り、そして上記の「拡張」によるさらなるメディア横断的実践の可能性を含め、プレイヤーはゲームを、そしてゲームで様々な形で遊んでいる。この遊びはゲームを超える場合も安易に想像できる。しかし、それは遊びと言えるだろうか。むしろ遊びが難しくなった

6/27 9:30-11:00
ルーム 4

Outsider Art kick it out!

あ文



Organizer
高岡智子
(龍谷大学)

Panelists
青木恵理子 (龍谷大学) 松本拓 (龍谷大学)
高岡智子 (龍谷大学)

既存の「いまあるものごと」の枠組みに揺さぶりをかける力がアートにはある。20世紀初頭に美術や音楽の分野でおこった表現主義、新即物主義、シュールレアリスムなどの「前衛」的な潮流はその好例である。今日では、新自由主義が蔓延し、社会と文化の周縁／中心、排除／包摂の二極化がすすんでいる。こうしたなかでアートは19世紀的な「自律性」へと向かうのではなく、社会や福祉の領域と結びついて新たな展開を見せている。民族文化のアート化、障害者によるアウトサイダー・アート、「だれでもアーティスト」をモットーとするコンテンポラリー・アートなどがそれだ。既存の枠組みの外にあるものをアートの領域に持ち込み社会に揺さぶりをかける、そうした可能性をこれらのアートは持ち得るのである。

アートは社会に対して何を成し得るのだろうか。この問いは、アートが社会において何らかの功を奏さなければならぬ、つまりアートが社会を変える「手段」であるという認識を前提としている。本報告ではむしろ、アートと社会・福祉のあいだのダイナミズムだけでなく、アートそのものが持つ可能性と不可能性を探求することに力点がある。

発表者3名は、それぞれ文化人類学、社会学、芸術学の視点からのアート、アウトサイダー・アート、コンテンポラリー・アートについて報告する。青木は、インドネシア・フローレス島の家づくりと贈与交換に関する文化人類学の調査を踏まえ、そこでの暮らしという観点からアートについて再検討する。松本は、「アート体験の共有」をキーワードとして、滋賀県の障害者福祉施設やまなみ工房におけるスタッフと利用者との関係性を軸とした創作プロセスについて考察する。高岡は、ドイツのカッセルで開催される国際展覧会「ドクメンタ」を題材に、教育、政治、歴史の観点からドイツ的な現代アートの傾向を探る。アウトサイドから襲撃するアートを内と外のダイナミズムのなかで読み解く。

ようにも見える。本発表では、抽象的な主張にとどまらないため、現代ゲームの代表作の一つである『集まれ動物の森』の具体的な遊び実践に焦点を当てる。オンライン上に記録されている様々な遊びの痕跡を分析し、『あつ森』がどのように「遊び」を提供し、触発するかを考察する。

6/27 11:10-12:40
ルーム 2

ドキュメンタリー

あ文



Chair

岩崎稔
(東京外国語大学)

Panelists

長谷川健司 (東京外国語大学大学院) 洞ヶ瀬真人 (名古屋大学大学院)
丸山友美 (福山大学)

Panelist 1 長谷川健司

「世界の虚構」に抗し、水路を拓く：医師・中村哲の治水思想

雪解け水が褐色の大地を潤すアフガン東部。気候変動に由来する災禍は、いち早くこの最貧地域に襲った。近年の断続的な高温化により、高山地帯の積雪が夏季に一気に融解するようになったのである。各地で洪水が頻発した。大地は保水力を漸減させ、アフガン全域が地下水位の低下に苦しむようになった。用水路が崩壊し、井戸は枯れた。2001年の同時多発テロ以降、山河が破れたアフガンで、米英軍は国をも破った。

戦乱と旱魃で難民化し斃れる多くの人びとを目前にして、はたして医師・中村哲は白衣を脱ぎ、治水家へと転身したのだった。「議論は無用、実行あるのみ」。先進諸国で座して語られる理論や評論を「世界の虚構」として拒絶し、中村は砂漠化した大地の灌漑・治水事業へと乗り出した。

取水堰や用排水路の建設に際し、中村が最重視したのが、現地の人びとの力だけで維持管理ができる構造であった。中央集権的国家の不在、工作機械の欠乏、電気の不通などを熟慮して中村自身が図面を引いた。最終的に採用されたのは、柳枝工・蛇籠工などの伝統的基礎技術、そして筑後川中流に現存する山田堰を参照した「傾斜堰床式石張堰(斜め堰)」であった。中・近世の九州地方の土木技術は重機も官僚機構も必要としない。試行錯誤を繰り返す中で、中村は自然と対決するのではなく、手元の資源だけでうまく和解する技法を二百年前の治水技術に見出したのであった。

中村は、技師や学者を名乗る者の言葉を信用しなかった。机上の理論は、それが前提とする物質的な豊さに無自覚であるかぎり無力であることを、臨床医療の現場で確信していたからである。だが、中村が誰よりも能弁に語ったのもまた事実である。それは「架空が現実を律し、人間の生産活動や思考を自然から遊離させ」る時代の趨勢を中村が危惧したからだ(『医者、用水路を拓く』)。現地と机上のあいだにある「軋轢」(同)の中で、中村自身もまた苦悩し内省を重ねたのである。

本報告では、目前の現実と「世界の虚構」に引き裂かれた中村の実践を精査し、それでもなお思想のようなものが残るとすればそれはどのようなものなのかを考えていきたい。

Panelist 2 洞ヶ瀬真人

「記録」のエイジェンシー：

『水俣一揆』に現れる、立場を超えた映像記録の政治性

社会批判を超える映像記録の政治的可能性について、土本典昭の水俣病ドキュメンタリーをとおして考察する。水俣病事件を描いた60年代以降の作家たちの実践は、50年代以前からあった「記録」の重要性(鳥羽2010)

にもまして、記録物の持つ媒介的な可能性に焦点を合わせていたようにみえる。当時の映像分野ではB・ラトゥールの論(2005=2019)にも通じる観点で、映像記録自体がもつ、制作者から観客への二元的なメッセージ伝達を超えた、両者に等しく働きかけ、問題への熟考を促す作用因としての力が提起されていた(羽仁1960など)。また記録映像自体が働きかける力を、作り手の政治主張としてではなく、人々が社会問題に公平な立場で向き合うための民主的な機会として用いることも期待されていたという(佐藤1977)。水俣病のドキュメンタリーには、これに呼応する観点が数多く現れる。

特に、自らの主張以上に水俣病事件の現実を徹底追及した土本典昭の映画には、批判を目的に論理を組むため非現実化する学知の反省としてラトゥールが提起した「連関の社会学」のような様相がある。例えば、チッソ本社へ自主交渉に乗り込む川本輝夫らの姿を記録した『水俣一揆』(1973)で土本は、被害者側の一員として現場に同行した。だが記録された映像は、川本らの訴えのみならず、それを受け止める嶋田賢一社長一同の苦悶までも克明に捉え、時に嶋田の背後から川本の慟哭を捉えるカメラの映像は、見る者を嶋田の立場にたたせもする。こうした記録を介して作られた作品は、土本らの怒りを滲ませながらそれに身を任せた企業批判に留まることなく、公害事件の渦中で複雑に絡む、立場を超えた人々の苦しみの連関を観客に開示する。本論では、作り手の信条を超えて見る者に働きかけるこの記録物の力を、善悪でははかれない要素に満ちた現代の社会問題に現実的に向き合う方途として振り返ってみたい。

Panelist 3 丸山友美

テレビドキュメンタリー前史としての「録音構成」

——『真相はかうだ』と『社会の窓』を中心に

本発表は、テレビドキュメンタリー(=フィルム構成)の前史と言われるラジオドキュメンタリー(=録音構成)に注目し、次の3点を明らかにしようとするものである。第一に、戦後のラジオドキュメンタリーが占領軍の指導によって「輸入」されたことに着目し、放送政策という動態のなかで検証する。第二に、番組を実際に制作していた日本人スタッフが、占領軍のフォーマットと自分たちのアイディアを掛け合わせながら、いかに日本のラジオドキュメンタリーに具体化していったのか把握する。第三に、占領軍が提示した民主的な番組のアイディアが、どのような経験を通じて「録音構成」として区別されていったのか検証する。

占領軍が日本に持ち込んだ番組フォーマットには、街頭で一般大衆の声を聞く『街頭録音(Man on the Street)』(1945-58)や、視聴者がスタジオにきて歌声を披露し競う『のど自慢素人音楽会』(1946-)、投稿懸賞型の『話の泉(Information Please)』(1946-64)などさまざまある。だが、『真相はかうだ』(1945-46)の展開プロセスを見ていくと、日本の民主化のためアメリカの人気ラジオ番組The March of Timeの演出手法を強いられた制作者たちが、新しいリアリズム形式に目覚め、生々しい現実を伝える表現形式を積極的に模索する「ドキュメンタリー」表現の足跡が浮かび上がってくる。

本発表では、『真相はかうだ』とそれに続く『社会の窓』(1948-60)や『時の動き』(1948-59)といったインフォメーション・アワー番組への展開から、フィルム構成の前史として論じられてきた録音構成の成立過程を、占領軍のラジオ文化受容と関連付けて検討する。

6/27 11:10-12:40
ルーム 3

パンデミックとツーリストの主体性

あ文



Organizer

石野隆美
(立教大学大学院)

Panelists

安ウンビョル (東京大学大学院) 石野隆美 (立教大学大学院)
岩本晃典 (北海道大学大学院) 遠藤理一 (西武文理大学)
中植渚 (立教大学大学院)

新型コロナウイルス禍、ツーリストはかつてなく「よそ者」である。従来の人文学的なツーリズム研究においてツーリストは、ツーリズムが内包する権力性や抑圧的構造を創造的にずらす者として、その「主体性」が期待とともに語られてきた。しかしその自由な行為主体としての特徴は今日、世論をすり抜けてウイルスをまき散らす「危険な存在」としてツーリストを糾弾する際の根拠ともなっている。とすれば、可能性への過剰な期待とリスクへの過剰な危惧に共通する、ツーリストを「主体的な存在」とみなすまなざしを問いなおす作業が必要だと思われる。

そこで本パネルでは、主体性とは異なる視点からツーリストを捉えなおす方途と、その可能性について議論する。遠藤による趣旨説明を経て、石野は、新型コロナウイルス感染症対策の文脈で生じた「犠牲者非難」に着目し、主体的な行為として特徴づけられてきた「選択」を受動的な実践として語りなおす可能性を人類学的な視点から議論する。安は、3.11以降の日本への観光移動へ向けられた韓国国内の言説を分析することを通じて、安全性／危険性が観光の文脈において問題化され、双方の領域が線引きされていくダイナミズムを考察する。岩本も同じく3.11以後の連続性を意識し、震災を経て地方へと移ったサーファー達の移住経験を分析する。その際、サーファーが織りなす「自然」との関係性に着目し、観光地における主体／客体の揺らぎを捉えなおすことを試みる。中植は、米軍用住宅をリノベーションした賃貸住宅街ジョンソンタウンへの一時的な移住に着目し、移住者による理想の暮らしを実現させるためのライフスタイル的実践の諸相を分析する。

本パネルはツーリストの「主体性」を解きほぐし、むしろ環境や言説に巻き込まれた彼らの姿を捉えたい。それはツーリストを「よそ者」としてではなく、あくまでも多くの人々と共通した受動性や被傷性をもつ者として捉える試みである。

6/27 11:10-12:40
ルーム 4

アートの感性の逆襲

あ文



Organizer

岡原正幸
(慶應義塾大学)

Panelists

プルサコワありな (慶應義塾大学大学院) 上岡磨奈 (慶應義塾大学大学院)
澤田唯人
慶應義塾大学文学部チーム (学生代表 山本かりん)

近代的な実証科学を範としてきた知の制度にあって、その対象にはなっても、それ以外の科学のプロセスや活動からは、排除されてきた「裏」がある。たとえば、研究主体の当事者性(性、セクシュアリティ、出身階層、エスニシティ、障害など)もそれである。ただしこれらは、ポストコロナな問題化をまって、徐々に表化されているかもしれない、しかし、依然として、裏にとどめ置かれているものがある。感情、アフェクト、芸術実践、

アートの感性などはそれではなかろうか。もちろん、近代社会の基本構制をみれば、近代科学とは別の社会空間を割り当てられてきたアート、芸術は、その空間では「表」として君臨する。感情、感性も比喩的には貴族並みの待遇を得てきたかもしれない。また、アートのアカデミズムも現に存在している。

このパネルで主題化するのは、アートの表現アウトプット、文学表現、映像映画表現、パフォーマンス演劇表現なども広く含めて、従来は科学の裏であったそれらを近代科学の流れにある社会制度の中に表から入れ込むことで展開される位相の探求であり、その意味であり、意義である。

端的には、アートベース・リサーチ arts-based research や、その類似の試み、アートベースの授業運営など、各パネリストが紹介、精査する。発表のスタイルは多様な表現形式を許すために、テキスト形式、口語形式に限定されない。

「裏返す」ことによる、新たな知のフュージョンが提供できればと考える。エモーショナルな発表がパネル全体をエモーショナルにすることを望んでいます。

6/27 11:10-12:40
ルーム 5

鳥取から「裏日本」を再考する

あ文



Organizer

アレクサンダー・ギンナン
(鳥取大学)

Panelists

渡邊太 (鳥取短期大学) 岡田有美子 (明治大学大学院)
アレクサンダー・ギンナン (鳥取大学)

20世紀の大半を通して「裏日本」と呼ばれてきた地域は、1990年代、冷戦体制の解体を契機に「環日本海」構想の一部として模様替えを試みた。環日本海構想とは、日本海の周辺に位置するロシア連邦、中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国、そして日本の地域をひとつの経済交流圏として結びつける枠組みであった。この枠組みは、「裏日本」の前提となる一国内の裏／表、地方／中央といった二元論に対するオルタナティブなビジョンを提示したが、中央政府の政治的思惑に振り回された結果、現在は頓挫している。

一方、「裏日本」「環日本海」のいずれの時代においても、これらのパラダイムの再考を促す表現活動が行われていた。本パネルでは、鳥取県内に拠点を置く3人のパネリストの発表を通して視覚文化から見えてくる「裏日本」「環日本海」の様相について考察する。

まず「裏日本」から「環日本海」への切り替えを振り返った上で、シベリア抑留を経て、故郷鳥取県倉吉市に戻り数多くの写真集を残した高木啓太郎(1916~1997年)の仕事、海や人骨のモチーフを描く浦島一昌(1938年~)の絵画などを取り上げ、21世紀の第一四半期を迎えている現在、何が変わったのか、何が変わらないのかを踏まえて「裏日本」を再考する意義について検討したい。

6/27 13:40-15:10
ルーム 1

「裏ルート」で交差する東アジアのアート

あ文



Organizer

稲垣健志
(金沢美術工芸大学)

Panelists

山本浩貴 (東京藝術大学)
呉夏枝
近藤健一 (森美術館)

本パネルのテーマは、カルチュラルタイフーンの「定番」、東アジアである。しかし、その内容はけっしてお馴染みのものではない。これまでの太平洋側でのカルタイでは、「東アジアの〇〇—日本、韓国、台湾—」といったように、東アジアを国家単位、かつ点でとらえるものが多かった。そこではこうした場所がどのようにつながっているのか、「日本」とは具体的にどこ(何)を指しているのか、といった点が示されてこなかった。それと関連して、この「表」のカルタイで決定的に抜け落ちていたのが、日本海、つまり「裏ルート」の視点である。東アジアはこの「裏ルート」を介して、歴史的、文化的、政治的に交差してきたのである。それにもかかわらず、表からの視点では、東アジアを語るうえで欠かすことができないはずのこの「裏ルート」が見過ごされてきた。そこで本パネルでは、具体的にどこどこが何と何が(個人、コロナル、経済、様々な意味で)、「裏ルート」を介して交差しているのか、それをあつかうアートを取り上げながら、東アジアという空間を再考してみたい。まず稲垣が、奥能登国際芸術祭のために石川県珠洲市で制作された「奥能登曼荼羅」(2017年)を手掛かりに、本パネルの趣旨説明をおこなう。次いで、呉が、韓国の済州島、福岡県鐘崎、そして石川県舩倉島という「裏ルート」をたどった海女たちの記憶を紡いだインスタレーション作品「空白いろのきおくに浮かぶ海女の家/船」(2018年)について報告する。そのあと、山本が、新潟港から北朝鮮・清津港への「帰国事業」をあつかった、高川和也とのコラボレーションによる映像作品《証言》(2020年)から、この「裏ルート」で交差するものを明らかにする。そして近藤は、各報告・作品、および全体に対してコメントを加える。そのうえで、フロア全体に対話を開き、この作品たちから浮かび上がる「裏ルート」の複雑性、歴史性、重要性とオーディエンスを交差させていきたい。

6/27 13:40-14:40
ルーム 2

島嶼における「生」からたどる歴史

あ文



Organizer

岡本直美
(同志社大学)

Panelists

岡本直美 (同志社大学)
金大勲 (同志社大学大学院)

本発表は、島嶼地域で生きる人びとの生(ライフストーリー)から歴史(像)を再検討するものである。島は、孤立性や閉鎖性、あるいは辺境性や従属性というイメージを抱かれてきた。一方で、島であるがゆえの開放性や自律性といった可能性をもつ場としても位置付けられてきた。それでは、島で生きる人びとからたどると、歴史はどのように描かれるのか。人びとは、何を拠り所として生きてきたのだろうか。本報告では、戦争や植民地、占領の歴史がどのように記憶されてきたのかを、島で生きる人びとの自治的意志や信仰から考察する。

岡本は、沖縄県伊江島で展開された伊江島土地闘争に注目する。従来の沖縄戦後史において、伊江島土地闘争は復帰運動や反米軍基地運動の前史として位置づけられ、「抵抗する主体」として評価されてきた。このように沖

縄を代表する運動の一つとして認識されてきたものの、伊江島の離島性は看過されてきた。本報告では、「抵抗」を前提に闘争を分析するのではなく、離島で生きる人びとの生から反基地闘争を再検討する。さらに、軍用地接収地である真謝区は、住民の移動経験が堆積された場である点に着目し、人びとがライフストーリーを根拠として土地接収に反対するプロセスを考察する。

金は、島である韓国済州島で生きてきた一人のキリスト教信者(発表者の祖母)の記憶から歴史を考察する。日本の植民地支配下で実施された皇民化政策に関わる経験を振り返る際に「愚かだった」「悔い改めた」と語った祖母の告白を取り上げ、記憶や歴史の媒介となっている信仰について検討する。キリスト教信者にとって信仰とは生活である。その信仰生活から歴史を再検討するために、「小説を書くことは信仰生活である」と語る三浦綾子の文章を手がかりとして祖母の告白を照射する。

6/27 13:40-15:10
ルーム 3

移動する若者 ——都市、メディア、グローバルゼーション

あ文



Organizer

藤田結子
(明治大学)

Panelists

荒井悠介 (成蹊大学) 狩野愛 (静岡大学)
鈴木亜矢子 (中央大学)

本パネルでは、ソーシャルメディアと結びついた時代の若者が、都市および国境を越えて、どのような新しい文化やライフスタイルを創出しているのかを、「移動」に着目しながら明らかにしていく。

第1報告では、最近、若者たちが地図アプリを利用し、友人同士で位置情報を公開・共有するようになっていく状況を取り上げる。研究の問いとして、若者が位置情報の公開にどのような意味づけをしているのか分析する。調査方法としてインタビューを中心としたエスノグラフィーを用いる。調査の結果、若者たちは、監視されている感覚を持ちつつも、「家族」的な繋がりを求めている可能性、さらにSNSを介しつつSNSとは離れた場で新たな若者文化を創出していることが明らかになった。

第2報告では、国境を越えた移動が常態化する日本人女性K-POPファンのライフスタイルと、移動経験の意味づけの機制について考察する。ファンたちの活動は多くの時間、金銭的支出をとまなう「異常」な消費活動して見なされ、ナショナリズムの側面からも反発の恐れがあるため、隠れて行わざるを得ない状況が存在する。また、現地の人々との私的交流も多くはない。

だが一方、ファン活動を通じた国際移動経験は自己成長感を促すものとして肯定的に意味づけされ、積極的な移動実践を行うことが明らかになった。

第3報告では、政治的なメッセージを木版画に刷るコミュニティのトランスナショナルな文化交流について考察する。反戦・反核をテーマに木版画を制作するA3BC(日本、2014~)は、インドネシアやマレーシアの政治的な木版画作品に刺激を受けて活動を開始し、その後同様のコレクティブが東アジアの各地で設立され活動を始めた。このようなネットワークは、若者と木版画の移動とともに広がっており、その背景には各都市のDIYカルチャーの拠点と、そこを出入りする人の繋がりが明らかになった。

以上の報告に基づきディスカッションを行う。

6/27 13:40-15:10
ルーム 4

脱植民化(デコロナイゼーション)のデザイン

あ文



Organizer

宮田雅子
(愛知淑徳大学)

Panelists

村田麻里子(関西大学) 谷川竜一(金沢大学)
宮田雅子(愛知淑徳大学)

世界はデザインの力で変わりうる。例えば、20世紀前半の帝国世界は終わりを告げたはずだが、帝国世界の歴史とその帰結である現状を、補強・変革・刷新していこうとする様々な力学が、デザインの現場では作動し続けている。それをスケール毎に切ってみると、都市という空間のデザインはもちろんのこと、街中の建造物や記念碑のデザイン、さらには国や地域の歴史や文化を「見せる」場であるミュージアム等の文化施設の中にもはっきりと発現している。さらには、都市空間や施設内に溢れる何気ない標識やサインデザインの部類すら、そうした力学と無縁ではない。他方で、それらのデザインの思想性に目を転じれば、脱植民地化は実に多様に、地域に根ざした奥深さをもって看取することができる。例えば被植民者側の脱植民地化への要求という「正当な権利」と対をなす形で、欧米圏を中心とする国々では脱植民地化はいまや社会が当然取り組むべき「使命」となっている。一方で、国や地域によっては、脱植民地化は完遂すべき目的ではなく、体制強化のために「利用」すべきイデオロギーとなっている場合もある。これらを踏まえ、本セッションは、脱植民地化のデザインの有り様について、それぞれの位相から発表する。

発表1(村田)では、脱植民地化を、展示・対話・再解釈といったミュージアム的手法を介したデザインという切り口から考える。グローバル化のなかで、自らのコレクションや展示を脱植民地化させようとする西洋諸国、そして先住民と向き合いながら対話のなかでミュージアムを変化させている豪・NZなどが事例となる。

発表2(谷川)では、植民地支配された側である朝鮮半島の都市空間の脱植民地化を考察する。日本植民地支配において建設された都市や建築は、その後新しい権力にいかにも再編・刷新されるのか。広場や記念碑、ミュージアムにも目を配りつつ、「脱植民地化」の都市デザインを探る。

発表3(宮田)は、サインや案内掲示といったグラフィックデザインに着目する。一見ニュートラルな視覚表現にも政治性が常に宿り、それは地政学的な権力関係はもちろんのこと、人々の日常の権力構造を強化したり再編したりする力も持つ。北欧のサインデザインを中心に、デザインの地域性と国際標準化の関係性に潜む力学を検討する。以上、本パネルでは、そうした脱植民地化を巡るポリティクスの相剋を「デザイン」という視点から考える。

ティの喪失に危機感を覚え、自らの歴史を再考し新たな文化的基盤を作る必要性を感じている。そこで、例えば、ある家族の物語を過去・現在・未来に及ぶ壮大な叙事詩として捉えて絵画制作し国家間の思惑に揺れる故郷(沖縄)を可視化することに思い至った。一家族、一地域の運命は一国の運命にもなり得る。それら人間に対する考察を深めるなかで、将来に対する提言もできるのではないだろうか。芸術が社会に対して果たせる役割は何か。レオナルド・ダ・ヴィンチの「絵画は一瞬のうちに視力をとおしてものの本質を一瞬で君に示す」という言葉を抛り所として、二十一世紀初頭の今日に相応しい絵画の在り方について、歴史的事実の入念な調査に基づく研究・制作を行い、発表する。それが今回、私が目指す「叙事詩的絵画の研究」である。

本研究は叙事詩について考察した文化人類学的アプローチと西洋絵画の構図法の研究をリンクさせている。レオナルドの絵画「マギの礼拝」の分析は従来の画一的な遠近法の理解に再考を促す意味で意義がある。沖縄の信仰、米軍基地、といった社会学のアプローチを提示する。

6/26 12:30-16:00
オンデマンド
6/27 13:40-15:10
ルーム 5

ウラカナザワ——引揚者たちの記憶が紡ぐまち

あ文



Organizer

大木紗英子(チーム「現場のふしアナ」代表・金沢大学人間社会学域)

本展示は金沢大学と金沢美術工芸大学の学生合同チーム「現場のふしアナ」による学際コラボ企画である。金沢は、加賀百万石の歴史ある城下町として、あるいは戦災を免れた小京都、そうでなければ21世紀美術館に代表される現代アートの雰囲気漂うオシャレなまちとしてプロデュースされがちだ。そんな「The金沢」とも言うべき近世と現代の煌びやかなイメージの陰に隠れているのは、近代——特に高度成長からバブル期に至る歴史である。なかでも「侵略者」と「被害者」という二重の意味を持つ大陸からの引揚者たちの物語や、彼ら・彼女らによる都市の再生といった歴史は、ほとんど語られてこなかった。表の顔である「The金沢」の裏には、日本海を越えて紡がれた戦後の記憶が存在するのだ。

この二重構造を、金沢の「表」から「裏」に入り込む空間を作って展示として表現することで、チーム「現場のふしアナ」による多角的調査レポートを展開する。四方を「表」の金沢で囲まれた空間の一部は、そのイメージを壊すかのように破られていて、そこから中に入り込むと、引揚者たちの歴史や記憶に基づいた「裏」の金沢が広がっている。「裏」には光や影を捉えることを意識した写真を貼り、引揚者たちがもたらしたのやそれらの潜在的なエネルギーを感じさせるものにする。また、映像では引揚に関係する人々の生の声やリアルな生活を映し、来場者が「裏」の金沢に肉薄する時空を提供する。簡易図録や写真集などを配布・販売することも計画している。

6/26 12:30-16:00
オンデマンド
6/27 13:40-15:10
ルーム 5

叙事詩的絵画の研究

あ文



Organizer

上原勇希(金沢美術工芸大学大学院)

私の故郷である沖縄はいまだに基地移設問題に揺れており、地理的、社会構造的な問題から具体的解決策は見出されていない。そのような状況の中、私は沖縄が日本文化や米国文化を受容してきた過程で生じたアイデンティ

6/26 11:00-14:00
SpatialChat
(詳細はホームページを
ご確認ください)

**雑誌 & ラジオ 『5: Designing Media Ecology』
の販売・試聴・トーク**

Selling, Listening to, and Talking on "5: Designing Media Ecology"

あ文



Organizer
水越伸 (東京大学)

『5: Designing Media Ecology』は、文化・コミュニティ・政治・メディア・芸術・デザイン・科学技術などの多様な領域を横断しながら、世界各地のさまざまな思想と実践を結ぶ媒体である。水越伸・佐倉統・毛利嘉孝が編集する雑誌『5』は、2014年創刊以後、日英バイリンガルで年2回の発行を続けてきた。2018年からは、同じ理念にもとづき世界各国の音や声を用いた実践を結んでいく「Radio5」の活動も始動した。節目となる雑誌の第10号を前後に控えたCT2021では、雑誌とラジオを組み合わせた以下のプロジェクトワークを行う。

所要時間 (6月26日・6月27日の二日間ほぼ終日)

1. 雑誌『5: Designing Media Ecology』の販売
2. 「Radio5」諸作品の試聴
3. ZOOMなどを利用したトーク企画

以上の機会をつうじて、来場者からの感想や評価をフィードバックし、よりひらかれた雑誌とラジオを実践し、同時にCT2021にも貢献したい。

ソーシャルディスタンス、アルコール除菌など新型コロナ感染予防対策をおこなう予定である。

<https://www.fivedme.org/>

6/26 12:00-15:00
SpatialChat
(詳細はホームページを
ご確認ください)

**参与するエスノグラフィー
——SNS が入り込む若者文化の形成
新宿、高円寺、渋谷を巡って**

あ文



Organizer
明治大学 商学部 藤田結子ゼミナール

吉川璃子 小熊結子 青木典彦 田中雪菜 本田幸希 佐藤有紗 浅葉太平 野田彩花 後藤恵理華 西山晋太郎 藤本大輝 内田貴成 倉石知佳 服部悟士 奥山美香 高江洲健太 石井航平 白砂光太郎 神丸大典 石原圭 細井舞 松木竜人 中村光希 吉田英菜 秋山夏海 壁谷佳穂 新美麻衣花

現代の都市、文化、エスニシティ、ジェンダーをテーマとしたエスノグラフィ調査のポスター報告、および展示、パフォーマンスを行う。

発表テーマは以下の通りである。

1. レトロブームと高円寺—都市と若者の関係性の変化
2. 新宿ゴールデン街—都市の盛り場が果たす役割
3. 大学—インカレの現状、若者の価値観とジェンダー
4. インドカレーと移民—インド・ネパール人が来日した理由や彼らの日常を明らかにしていく。
5. ライブバー—コロナ禍でのライブ音楽の変化やライブ音楽とそのコミュニティの価値
6. サイファー—地域性に強いこだわりを持つラップに関連したサイファー

これらのテーマの参与観察を通して、フィールドで「参与」したラップやライブなどの披露や、フィールドの写真の展示も合わせて行う。

また同時に、オンライン配信 (clubhouseなど) でのトークセッションを行う。博報堂、LINEなどの企業からコメンテーターを招く。

カルチュラル・タイフーン 2021 実行委員会および大会委員会紹介

Cultural Typhoon 2021 Organizing Committee Members

開催校実行委員

稲垣健志（金沢美術工芸大学）

大会委員

荒井悠介（成蹊大学）／井上弘貴（神戸大学）／大石茜（筑波大学大学院）／ケイン樹里安（大阪市立大学）／
竹崎一真（成城大学）／村田麻里子（関西大学）／毛利嘉孝（東京藝術大学）／山本敦久（成城大学）

協力

石引パブリック／映像ワークショップ／日高良祐（東京都立大学）

表紙デザイン

石引パブリック

パンフレットデザイン

時田葵（東京都立大学大学院）